



TITLE:

静脩 臨時増刊号 京都大学附属図書館創立100周年記念 (1999.11) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 臨時増刊号 京都大学附属図書館創立100周年記念 (1999.11) [全文].  
静脩 1999, 臨時増刊号(1999)100周年記念

ISSUE DATE:

1999-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66031>

RIGHT:

京都大学附属  
図書館報

# 静 脩

臨時増刊号

京都大学附属図書館創立100周年記念

1 9 9 9

京都大学附属図書館

## ご 挨 拶

京都大学附属図書館は、1899（明治32）年12月に開館し、今年創立百周年を迎えました。図書館報『静脩』も、これを記念して臨時増刊号を編むことになりました。

この臨時増刊号には、長尾 真総長の巻頭言を頂くことができました。また歴代館長のご寄稿、さらには重要な時期に図書館の運営を担った方々の思い出の記をいただきました。

こうした歴史の証言と、現在図書館の活動を担っている職員の手記や図書館利用者の声とをあわせて、図書館の過去と現在を確認することは、これからの京都大学図書館の歩みを確かなものにする上で大きな意味を持つといえるでしょう。

この機会に、さまざまな形で京都大学図書館にかかわった全ての人々に感謝の念を捧げるとともに、これからも図書館の発展にお力添え戴けますよう、お願いする次第です。

平成11年11月29日

京都大学附属図書館長  
菊 池 光 造





The Kyoto University Library Bulletin

# 静脩

1999年11月

 附属図書館  
 創立100周年記念  
 臨時増刊号

## 大学は図書館と共に

京都大学総長 長 尾 真

京都大学の図書館は560万冊余を持つ全国有数の図書館であり、国宝や重要文化財の指定を受けた文書を含み、多数の古文書を持つなど多くの特徴をもつ図書館である。ただ我々の誇りとするこの図書館にも以下に述べるような種々の課題が存在する。

たとえば、図書館は60余りの図書室に分散されていて、それぞれの図書室では独特の分類方式をとっている。したがって他部局の図書の利用はかならずしも便利に出来るわけではない。

京都大学全体として図書に使われる金額はかなりの額であり、年間に約9万冊を購入しているが、中央図書館である附属図書館では定期的に購入することが指定されている図書・雑誌を除いて、毎年自由に選書して購入できるのはたったの3000冊程度である。まことに寒々とした気持ちにさせられる数字である。

そもそも大学図書館は研究者向けの研究図書館と、学生の勉強のための学習図書館をもうけ、それぞれの目的にそった書物を体系的に購入し、提供すべきものである。研究用の図書館は各専門分野ごとに作られるのが自然であるという点からは、京都大学に60余の図書室があるのもうなづけるが、今日のように学問が学際的になってくると、なるべく大きな単位の図書室の方がよいというのが一般的な考え方であろう。

医学・生物学図書館、自然科学・工学図書館、人文・社会科学系図書館といった単位の方が総合的な利用に便利であるし、また人員不足の図書館司書の過重な仕事が少しでも緩和されるだろう。



京都大学のほとんどの図書は、原則的にはその時の研究者の関心によって購入されており、学問全体の立場からバランスのよい選書が行われているわけではない。図書館は全体として1つのバランスのとれた知識の体系という観点から情報を集める必要があるが、そういった点からは京都大学の図書館もかならずしも満足のゆくものではない。

たとえば図書館は図書や雑誌のほかに各種の資料を収集することが大切であるが、日本の場合、その重要性は一部の人にしか認識されず、この方面にお金を使わず、したがって資料収集の専門家もほとんどいないというのが実状である。京都大学の場合にも図書館としてそのような努力はほとんどなされていないと言わざ

るをえないだろう。資料こそ学問の出発点であり、研究のための材料であり、書物を書くための基礎を与えるのである。

京都大学の図書館は研究図書館としてはまずまずのものであろうが、学生のための学習図書館という観点からは全く不十分であると言わざるをえない。総合人間学部図書館と附属図書館の一部が主としてその役割りを担っているが、教養教育や学部教育のカリキュラムに対応した図書が十分に備えられているとは言えないし、毎年新しく出る教科書や参考図書、一般教養書などを十分に備えるだけの予算がない。また図書館の閲覧機の数が十分でなく、今日必要とされるコンピュータネットワークのコンセントもわずかしが設けられていないという状態である。

日本の大学の図書館は、欧米をはじめその他の国の大学の場合のように学生に利用されていない。京都大学附属図書館への学生入館者は非常に多いが、その多くは自分の勉強の座席をとるためにやってくるのであって、図書や資料を利用するための学生は限られている。

それは日本の大学の講義の内容、学生の学び方が図書館を利用することを考えて組み立てられていないからである。講義の参考書はいろいろと示してはあっても、それらを読ませて報告書を書かせるといったことが積極的に行われない。自分の出席している講義のいろんなテーマについて資料をしらべて自分の考え方を形成し、それを論文や報告書の形にまとめて提出するといった形の、いわば学生が能動的に講義に参加するタイプのクラスを徐々にふやしてゆく努力が必要であろう。

こういった図書館利用の学習は、将来はインターネットや電子図書館利用という方向に変わってゆくだろう。学生は自宅からいつでも自由に

図書館やインターネット上の情報が使えるようになるという環境変化を視野に入れた図書館サービスと講義の組み立て方をこれから工夫してゆく必要がある。いずれにしても、学生が主体性をもって能動的に講義に参加し、主体的に勉強するための1つの重要な核としての大学図書館でありたいものである。

今日、情報爆発という言葉がよく用いられるようになってきているが、情報はもはや1カ所で集中的に収集し蓄積することは不可能である。情報の発生源に最も近い所で収集蓄積し、相互利用するという形の分散共有のシステムを構築してゆく以外に方法はない。したがって、図書館間の連携は国立国会図書館はもちろんのこと、公共図書館、私立図書館など、大学図書館だけといった境界をもうけずに相互協力をしてゆく必要があるだろう。

同じことは海外の図書館との連携についても言えることである。全ての大学図書館は電子カタログ情報(OPAC)をインターネットに公開し、大学人には自由なアクセスを許すということに国際的に同意すべきであろう。そして原資料へのアクセスについては大学間で個別の協定を結ぶとか、英国図書館の貸出し部門が行っているように適当な料金を支払うことによって実現することが考えられる。いずれにしても、これからは国際的な協力という方向への積極的な努力が必要で、図書館員は研究者と他大学の図書館との間の橋わたし役という大切な仕事をする必要があるのである。

京都大学図書館が学生・研究者にとって頼りがいのある、大学の中心的な機関として、より一層の発展をしていっていただくことを期待して、百周年のお祝いの言葉とします。

(ながお まこと)



# 京都大学図書館の現地点

附属図書館長 菊池 光 造

京都大学附属図書館は、今年開館百周年を迎えた。この間、図書館は歴代館長の先生方や数多くの図書館職員みなさんの努力に支えられて発展してきたのであり、この機会を借りて、まず京大図書館の発展に寄与してきた方々にお礼を申しあげたい。現在京都大学図書館は、附属図書館を中心に64の部局図書館・室によって構成され、蔵書数約560万冊(附属図書館所蔵分80万冊)、入館者は附属図書館だけをとっても年間約75万人、したがって1日平均2500人(定期試験の期間には約5000人)をかぞえ、また電子図書館化の先行館の一つとしても活動を続けている。

「図書館」といっても、いまや学術情報、いや広くいって知的情報は、もはや活字と紙のみならず、画像・映像・音声・音響による情報の創造・伝達・保存・利用がおこなわれるマルチメディアの時代であり、図書館もマルチメディア図書館化しているわけだが、中でも情報の電子化による「電子図書館」の展開は刮目に値する。

私は、こうした状況を「ハイブリッド型図書館の時代」と呼んでいるのだが、これからの大学図書館は、従来型の書籍・活字資料を中心とする「従来型図書館」と電子化された学術情報によるいわゆる「電子図書館」とが併存・補完しあい、分かちがたく結びついたものとして展開することになる。京都大学図書館としては、双方を充実させつつ、いかにシームレスかつ効率的に図書館全体の機能を展開するかが課題であるといえよう。

ところで京都大学電子図書館は、本格的にオープンしてから、まだ2年足らずであるが、画像14万枚に及び、古典籍や明治維新資料など京都大学らしい特色を持つものとして、幸い好評を得ており、海外からのアクセスも増加している。図書館電子化をめぐるのは、本号の中でも現状報告がなされると思うので、ここでは一言

ふれるのみにとどめるが、情報発信の面では、学内での研究状況・研究成果をいかにコンテンツの中に盛り込んでいけるかが課題であり、情報配信の面では、



オンライン電子ジャーナルのタイトル数をいかに増やしていくかが課題だといってよい。とりわけ後者については、外国雑誌の値上がりが激しく、一方で購読のための予算が増えないという状況のもとで、国立大学共通の悩みを解決するためにも、コンソーシアムによる共同購入等の工夫を重ねて、何とか研究者のニーズに応えるような前進を図らねばならないだろう。

いまひとつ、図書館電子化をめぐるのはOPAC (Online Public Access Catalog) の問題がある。図書情報のオンライン検索は圧倒的な利便性を持っており、学生諸君の中には、カードシステムに馴染めず、OPACで出てこなければその本や資料は存在しないとさえ思い込む人が増えている。しかし、実際のところ学内でOPAC検索できるのは1985年以降に受け入れた約100万冊の書籍のみであり、京都大学図書館百年の蓄積である全学560万冊余の全蔵書から見れば、その6分の1に過ぎない。1日も早く全蔵書の「遡及入力」をおこなってOPAC化をせねばならないのだが、これには膨大な費用が必要となる。これも国立大学共通の悩みであるが、さいわい、今年6月にまとめられた学術審議会答申(「科学技術創造立国を目指す学術研究の総合的推進について」)の「中間まとめ」において、大学図書館を軸にした図書資料の効率的な相互利用、その前提となる「遡及入力」の重要性の指摘が盛り込まれた。ようやく経費

要求の公的な拠り所ができた今、国立大学図書館協議会での共同事業として、ぜひ一挙的な遡及入力実現の方途を探らねばなるまい。

さて京都大学図書館では、百周年事業の一環として、今年図書館の「外部評価」を実施していただくことにしている。この百周年を機会に、学外の専門家たちによって、専門家の目で京都大学図書館の現状を分析し問題点を指摘していただき、これからの図書館のあるべき姿、取り組むべき課題を明らかにして、京都大学図書館の進むべき方向、改善のための手がかりにするのが目的である。京都大学図書館の百周年は、まさに世紀の変わり目の年と重なった。独立行政法人化の動きなど、大学および大学図書館を取り巻く環境・条件が急激に変化しつつある現時点で「21世紀に向けて・・・」とまで大きく構えることはむしろ不適切であろうが、少なくとも中期的スパンで図書館の取り組むべき課題を明らかにしたいと考えている。

その外部評価のための資料として、すでに図書館利用者のアンケートを実施した。アンケートは全学規模で各部局図書館・室を含めて実施したが、短期間にもかかわらず多くの方の協力を得ることができた。現在その集計と分析をおこなっているところである。いうまでもなく、京都大学図書館は、研究図書館的性格の強い部局図書館・室と、一般教養・教育図書館的色彩

の強い附属図書館とによって構成されているわけだが、今回のアンケートを通じて、いかに多くの学部学生たちが附属図書館に対する要望をもち期待を寄せているかを、改めて認識することにもなった。いずれにしても外部評価の前提には、自己点検・自己評価こそが必要であり、附属図書館自体については、現在アンケート結果も参考にしつつその作業を進めている。

ところでアンケートは各部局図書館・室の利用者の声を聞くものでもあった。この機会に、ぜひ各部局図書館・室においても、アンケート結果も参考にしながら、自主的に各部局図書館・室の「現状と課題」を明らかにする作業に取り組んでいただきたいと願っている。

京都大学では、部局自治の意識が強烈であり、図書館の運営についても各部局の独自性が強い。全学60余に及ぶ部局図書館・室相互については、従来「調整された分散主義」という言葉が使われてきたようだが、アンケートを瞥見する限りでも「もっと垣根を低くして学内諸部局図書館・室間の相互利用を容易にすべきだ」という声もあり、この機会に、「調整」の中身も再検討しながら京都大学図書館システム全体として、利用者の期待に応えることのできる、効率的なシステムを作り上げて行きたいと考えているところである。

(きくち こうぞう)



OPAC及び電子図書館  
で検索中の利用者



『今昔物語集』などが  
保管されている貴重書書庫



## 館長時代の思いで

西 原 宏

私が附属図書館長を務めたのは定年直前の昭和59年4月1日から61年3月31日までの2年間である。図書館学の実践の場という伝統的な図書館から、長尾真館長が御自身で開拓されその実現に先駆的な試みをされたところの電子図書館へ移行する過渡的な時代に当たって、全く思いも掛けずに附属図書館長に就任することになった。

私の前々任者である林良平先生は9年間にわたる異例に長い館長御在任中に附属図書館の近代化へ向けての布石と準備を周到綿密に計画され着々と実現して行かれ、新図書館の竣工する1年前に高村仁一先生と交代された。高村館長は新図書館への再移転と図書館財政の強化に尽力された。私は偉大な両館長の跡を継いで、附属図書館にとってまことに重要なこの時期に、一体、自分は何をしたらよいのかを考えずには居られなかった。

定年退職まであと2年という年であったので、新しいことを考え出すより、諸先輩が既に提言された事業のなかから、やり甲斐があり実現の可能性があるにも関わらず未着手のままになっているものを発掘しようと考えた。そう考えて『静脩』及び『学報』のバックナンバーを調べたところ、そこは思った通り宝の山であった。

そのなかで私が特に注目したのは、林良平館長が丹羽義次大型計算機センター長と共同で作成された京都大学学術情報ネットワーク建設の提案であった。この提案は総長の諮問に対する答申として京都大学学報に掲載されたが、実現の手続きをとらないままになっていたのである。大学学術情報センターが置かれ、全国の大学を結ぶ情報幹線を文部省が建設に当たるのに呼応して、学内の学術情報ネットワークはそれぞれの大学に委ねられる状況の中で、この答申はまことに時宜を得たもので、その実現に向けた努力を始めるべき時に当たっていた。

附属図書館内で意見を聞いたところ、進行中の図書館の電算化との連携を念頭に、世話部局として実施の具体的計画の作成に協力しようということであったので、図書館商議会に諮り承認を得た。このための全学の委員会が設置されたので丹羽大型計算機センター長と協力して計画案作成の作業に着手した。ネットワークの具体案の作成は堂下修司教授にゆだねることとした。堂下教授は当時データ通信の技術が飛躍的に進歩する時期に当たっていたことに鑑み最新の設計とすること及び本学の多数のキャンパスが同等の条件で利用できることを2本の柱として優れた設計を提示された。委員会は直ちにこの設計を骨子とする建議書を沢田総長に提出した。沢田総長はその重要性を直ちに見抜かれ、本学の事業計画として取り上げられたのである。このことは忘れがたい思い出である。このネットワークは私の定年退職後、大型計算機センターに置かれた西島総長以下の建設本部の方々による強力な体制でKUINSとして実現した。本学に学び、研究教育に携わる人々にとっては、またとない贈り物となった。

附属図書館には事業の規模に対して人員も予算も十分でなく、図書館業務の電算化の新しい仕事が増え、また各部局の図書室との関係もあり、それぞれ事務部長を始め各課長には随分苦労をかけたが、私にとっては在任中は幸い比較的穏やかに日が過ぎた。当時の図書館員・関係者の方々に限らない感謝の念を覚える。

当時、4階の館長室からは生駒山がよく見えた。秋の夕方の空を夥しい数の鳥が南に向かって渡っていくのが見えた。やがて2年の任期が過ぎて3月31日となり、二階堂総務課長と共に学内の各部局への挨拶回りを終え、図書館前で課長と別れ、昭和17年9月に入学以来40年余り通った京都大学の本部キャンパスを、あとを振り返らずに立ち去った。

(にしはら ひろし：元附属図書館長)

## 思い出二題

西 田 龍 雄

この11月に京大附属図書館は創立百周年を迎える由、誠に慶賀にたえません。

私は平成4年3月に定年退職しましたが、同時に館長の任期も終り、図書館を去りました。前後2期6年の間、いろいろの方々のご支援をいただきましたこと改めてお礼申し上げます。館長時代の思い出というテーマを与えられたので、就任した初めの年度に起った残念な事件と任期終了前にあった嬉しい思い出を一つづつ記してみたいと思います。

昭和62年の年頭、祝賀気分がまだ抜けきらない1月8日に、目録カードが何者かに奪われ投棄されたという知らせがありました。当時は電算機による目録検索はまだ軌道にのっていない頃で、図書管理の要であったカードが2千枚近くも構内数力所で前後4回にわたって投げ棄てられたのです。大きい衝撃で誠に遺憾でした。その頃の緊迫した学内情勢の中で、可能な限りの探索が行われた結果、ある程度の背景はつかめました。この事件は計画的なある意図のもとに行われたものではなく、結局は妙な結末になったように記憶します。岩井部長から受け取った詳しい記録が手許にあったのですが、いつのまにか紛失してしまいました。ともかく各部局のご協力のお陰でことがそれ以上に拡大しなかったのは不幸中の幸いでした。

嬉しい方の思い出は、退職の前年秋の恒例の展示会で「東アジアの文字と文献」を企画してもらったことです。それまでの展示会と違ったところと言えば、小冊子の解説目録を作って配布したことでしょう。毎回解説目録の要望がよせられていましたが、それを実現したのです。当時洋書目録掛長であった谷口敏夫氏（現在光華女子大学助教授）が連日おそくまで作業を進めてくれましたお陰で小冊子はB4判21頁の簡潔な体裁にでき上がりました。研究室の家本太郎氏や文学部の数名の教官にもご協力いただきました。

裏表紙には文学部所蔵の口口文字写本の一頁をもってきました。これは貴重本の指定を受けていませんが、新村出先生の時代に購入した極めて珍なる書で、日本のどの図書館にも類似の品はないと思います。まだ内容の決定はできていませんが、おそらく四川省の彝族が古い彝（イ）文字を使ってたて書きにし右から左に行を移して書いたもので 印に朱を入れた独特の句点も見られます。古ぼけた外装をもったその実物も展示しました。

表紙は口口文字と並ぶ納西（ナシ）文字にしたかったのですが、その經典の実物はどこにもありませんので、私が先年雲南省麗江で入手し持ち帰った納西の絵文字の一枚を使うことで同意を得ました。これは最近の作で決して貴重なものとは言えませんが、裏打ちしましたので見栄えのある形になっていました。「舞踏を教える殿様蛙」と名付けました。

納西族の間では地球上にもっとも早く出現した生物は金色の大蛙であると言い伝えられており、人類の踊りはその蛙の跳躍にヒントを得てできたものと考えています。また1980年に麗江県立図書館の書庫で納西族の古い踊りを詳しく解説した2冊の書物が発見されています。それらに因んで誰かが納西文字風に蛙の踊りを書いたのでしょうか。

この展覧会は好評の中に終わったと記憶しますが、初日の夕方に開かれたパーティで当時大阪大学の館長をしておられた越田教授から蛙にはペニスはない筈だがとご指摘を受けました。この生物学者の眼力には参りました。よくよく見るとこの蛙には黄金のお臍もついているではありませんか。わが家の家宝となったこの絵文字はそののち『京大広報』の表紙になり、私の退休記念に造ったテレホンカードにも使いましたが、その部分を隠すわけにもいかず、急所とお臍を出して登場しています。

今年の6月に、蛙の故郷麗江を再度訪れまし

た。大地震のあと町はすっかり変貌していて旧市街には多少昔の面影があるものの、大きい近代建築が立ち並んでいました。それでも市街地を30分ほど離れると昔ながらの石畳があり、長い旧家の塀に沿って静かに流れる小川のきれいな水で納西族のおばさんが野菜を洗っている長閑な風景も残っていました。

時代の大きい流れの中でつねに変わらないものの不動のものがあるようです。それらは変えてはならないものであるかも知れません。

京大附属図書館の益々のご発展を祈念いたします。

(にしだ たつお：元附属図書館長)



京都帝国大学附属図書館  
(明治32年竣工)



物資不足の中で昭和23年に完成した附属図書館



現在の附属図書館  
(昭和58年竣工)



## 館長時代の思い出

万 波 通 彦

京都大学では各部局の図書室が整備されています。私には、附属図書館は自分の専門以外の特別な調べ物をする場所ではありませんでした。その附属図書館の館長に任命されたのは定年の一年前でした。前館長の長尾真先生の路線完成を工学部の誰かがやれという理由で選ばれたと思っています。

館長として図書館全体を見渡したとき、改めて驚いたことは、学部学生の利用が多いにもかかわらず、一般図書の購入費が僅かなことでした。過去百年間の先人の努力で附属図書館には立派な蔵書が揃ってはいるものの、一般向けの新刊書は多くありません。カリキュラムに関わる施設以外の学生向けの施設が、学部教育に重要な役割を果たしていることは言うまでもありません。学生の利用しやすい附属図書館もその重要な施設の一つです。すべてが図書利用者ではないにしても、一日平均1830名の学部学生が附属図書館に入館しています（平成8年度）。幸いにその年度は、当時の総長井村裕夫先生のご配慮により学長特別経費で多くの新刊書を買いましたが、このような貧しい一般図書購入費が何年も続けば、附属図書館はその機能の一部が果たせなくなると心配しました。

在任期間中のことで図書館の年代記に書かれるのは「電子図書館」の設置と「図書業務システム」の更新でしょう。特に「電子図書館」とは何かも分からずにその誕生に立ち会うことになりました。私は図書館のホームページで蔵書の検索ができる程度なのが電子図書館の機能と思っていました。インターネットを使えば、自分の机の上で多くの学術雑誌の論文タイトルが読め、論文検索ができます。それに加えて、それまで読みたくても入手できなかった書物が無料で入手できました。図書室とは関係なく必要な情報が利用できるのですから、これが電子図書館と結びつくとは思ひも及びませんでした。

たしかに、電子化情報は誰かが作らなければなりません。京都大学の電子図書館では「京大

エンサイクロペディア」と言うキャッチフレーズで代表される情報発信が目玉でした。従来からネット上で公開してきた貴重書画像の充実に加えて、京都大学の学術情報をインターネットを通じて内外に発信します。最初から予想していた通り、学内で出版され、学会で評価の高い学術雑誌はエンサイクロペディアに含めることは出来ませんでした。京都大学百年史、博士学位論文論題一覧等が順次入力、公開されているようです。貴重書画像の公開は附属図書館のセールスポイントの一つですが、公開の仕方、書物の選択には慎重な配慮がいるのではないのでしょうか。知る限りでは、大きな公共図書館でも大学図書館でも、このような貴重書画像を大規模に公開をしているところはありません。

京都大学の附属図書館である限りは、京都大学内へのサービス（情報配信）が不可欠です。図書館事務部長の高橋柏氏等の努力で学内向けの電子ジャーナルも不十分ながら32タイトル、ネット対応の各種CD-ROMも充実できました。よく言われるように情報は無料ではありません。電子ジャーナル、ネット対応CD-ROMを今後どのように維持充実させるかという大きな問題を残してしまったと思います。

図書館長が兼ねる京都大学百年史編集委員長の仕事は、服部春彦教授（文学部）を始め多くの方々と百年史編集資料室の西山伸さんの努力で予定の出版は無事終わりました。校正段階では京都大学の歴史を丁寧に読みました。今から思えば楽しい経験でした。館長として勤務したのは一年間、歴代館長の中で最短記録です。何もしなかった言い訳とします。前館長長尾真先生が引かれたレールを走るのがやっとでした。電子図書館の情報発信・配信に悩みながらも、脱線しなかった（？）つもりですが、ひとえに支えて下さった事務部長を始め図書館職員のおかげと感謝しています。それにしても素晴らしい一年間でした。

（まんなみ みちひこ：元附属図書館長）

# 大学図書館変革期の20年

岩 猿 敏 生

私の京大図書館在職は1956年から76年までの20年間である。前半の10年間は、戦後の貧しさから高度経済成長への助走期であり、1956年の経済白書は“もはや戦後ではない”と宣言した。しかし、当時言われた神武景気も国民生活のすべての分野にまで及んだのではない。私の就任時の図書館は、予算面でも施設面でも、戦後の貧しさをそのまま引きずっていた。

ただ幸いであったのは、図書館活動に熱意を持つ若い職員と、経験豊かなベテラン職員を擁していたことである。このような人材を持っていたことが、1961年に附属図書館創立60周年を記念して、わが国最初の単館の大学図書館史の刊行を可能にした。それは、図書館60年の歴史を顧みることによって、新しい時代の大学図書館の出発点を確認しようとする試みであった。

戦後の教育改革全般がアメリカをモデルにしたように、大学図書館の改革もアメリカにモデルを求めた。私は幸いにも、飛躍的な発展をとげつつあったアメリカ各地の代表的な大学図書館を、1959年秋という比較的早い時期に、2ヶ月間にわたって訪ねることができた。しかし、旅行中私は彼我の落差の余りの大きさに、日本の大学図書館の将来について絶望感さえ抱いたが、大学図書館の向かうべき新しい方向だけは、はっきりとつかみとることができた。それは、なによりもまず学部学生への図書館サービスの充実であった。

私がアメリカを訪れた年、ミシガン大学の学部学生用図書館が、ハーバード大学のラモント図書館に続いて完成したばかりであった。「書物のための殿堂」としての図書館から、「利用者のための殿堂」へと、大学図書館のあり方の大きな転換を明確に示すものであった。

新制大学発足後も、わが国の大学は教育不在を批判されていた。高等教育への進学率が15%をこえる時、大学は少数のエリート学生だけが学ぶエリート型から、多様な学生が大量に進学

するマス型大型へと、その性格が大きく変わっていきと言われるが、わが国で高等教育への進学率が15%をこえたのは1963年であった。大学紛争の激化した1970年の進学率は24%であった。教育不在と言われた上に、マス型化という大学じたいの変化に、大学がうまく対応できなかったことが、当時の大学紛争の原因にあったと思う。

私の在職した後半の10年間は、1968年に始まる全国的な激しい大学紛争に揺れ動いた時代であった。他大学では図書館も紛争の渦中に巻きこまれ、学生によって封鎖されることもあったが、本館の場合、周辺の学部の建物がすべて封鎖されていたにもかかわらず、平常通り開館することができ、いつも学生たちで満席であった。

60年代後半から70年代にかけて、図書館業務にコンピュータの導入が試み始められる。それは、紙メディア中心から電子メディア中心への図書館の大きな変革期の始まりであった。私の在職した20年間は、日本の大学がエリート型からマス型へ、さらに情報媒体が紙メディアから電子メディアへと、大学図書館にとっては二重の大きな変革の過程の歳月であった。

本館の創設された翌年（1900年）の本学の蔵書数は7万6千冊余。同年東大は26万冊をこえていた。こうした数字は、当時のアメリカの大学図書館のうちハーバード大学には遠く及ばないが、その他の大学とは比肩しうる。開館時間数においては、本館も東大も朝7時から夜9時まで1日14時間である。当時アメリカの大学図書館でも、まだ日中だけ週に10数時間程度しか開館しない図書館がかなりあった。今世紀初頭では、いくつかの数字の上でみると、彼我の間に大きな落差はなかった。しかし、その後落差が大きくなっていくのは、大学の教育・研究の上で、図書館にどれ程の重要性が与えられるかによるのではないかと、本館の歴史を顧みて思わざるをえない。

（いわさる としお：元附属図書館事務部長 元関西大学教授）



## 百周年を迎えるまでの3年間

高 橋 柏

私は1996年4月から99年3月まで3年間、附属図書館で仕事をした。3年で3人の館長に仕えた。館長は任期3年である。長尾館長は任期を1年残し97年4月工学研究科長になった。館長候補者は附属図書館商議会議委員の選挙で選ばれ、総長が評議会の了承を得て指名する。館長候補者選考には、細々とした手順があり、通常4ヶ月かけて行われるが、2月に正式に長尾館長の工学研究科長の就任が決まってから手続きに入ったので、1ヶ月足らずで館長候補を決める必要があり、商議会の日程調整に苦労した。後任は工学研究科の万波館長で、停年1年前だったが選ばれた。98年4月就任の菊池館長も3年の任期を待たず2000年3月停年となる。京大の選挙への考え方は、その時点での最適任者を選ぶことに徹しているなという感想を持った。

毎年新しい館長となっても、全く困らなかった。識見豊かな3先生に素晴らしいご指導をいただいた。長尾館長には日曜開館、附属図書館のリニューアル、電子図書館、百年史の編集、学生用図書費の増額、万波館長には国立大学図書館協議会総会の京都開催、京大創立百周年記念事業、電子図書館及び業務システムの稼働、百年史の編集、菊池館長には全学共通科目「情報探索入門」実施、部局図書室との連携強化、3階閲覧室の開設、A Vホールのマルチメディア化、百年史の編集と盛り沢山の仕事をやっていただいた。3先生とも大学とりわけ学生思いだった。特に学生の学習環境の充実には尽力いただいた。任期は別として、3館長とも任務は十二分に全うしていただいた。

このなかでも電子図書館システム導入は3年間で職員皆が最も力を傾けたものの一つである。電子図書館は長尾館長の研究テーマだった。長尾先生は90年頃から電子図書館研究会を主宰し、学内外の研究者、図書館員と研究し、パイロット電子図書館システム「アリアドネ」を制作、実験を重ねていた。図書館は長尾先生の好意でシステム一式を借り、コンテンツの制作等について実験していた。

96年4月赴任直後、電子図書館に関して学術審議会の建議が近々出されるので予算化される可能性があることを長尾館長に申し上げたところ、ぜひ概算

要求して欲しいとのことだったので、急ぎ若手職員が集まり情報発信型の京大電子図書館構想をつくった。時々、長尾館長にビールを無心し、館長を囲んで電子図書館についてアイデアを出すブレインストーミングを行った。京大電子図書館のキャッチコピー「京都大学エンサイクロペディア」「机の上に京都大学を」はそんな中での若手職員の合作だった。5月の商議会で概算要求事項の変更について了承を得た後、文部省に概算要求書を提出した。幸い、長尾館長は、総合情報メディアセンター、情報学研究科の創設のこと等で頻りに文部省に行っていたので、ついでに、担当の学術情報課長にも何度かお話をいただいた。

電子図書館の予算でコンピュータの借料が従来の3倍になった。業務システムの更新とシステム導入が同時だったので、一挙に全学の図書館システムがオープンシステム化され、長尾館長が目標とした「全学図書館職員に1台のパソコン」が実現した。業務の標準化をめぐる理学部から教室自治を侵すものとの批判もあったが、90名を超える職員がワーキンググループに参加し、研修会も頻りにやることができた。附属図書館、部局図書室を問わず皆が熱心に取り組んでくれた。98年1月目録検索システム、貸出業務はじめ業務が順次動き出した。新しいシステムが軌道に乗るまで多少時間がかかるが、その間殺到する苦情の処理に追われた職員の方々には心からお礼を申し上げる。導入作業の真っ只中で「要」の水野受入掛長、長嶺経理掛長が急逝した。かえすがえすも残念なことである。

京都大学では、97年4月、総合情報メディアセンター、情報学研究科、電子図書館が発足した。従来からの大型計算機センターとあわせ、最先端の情報に関する教育、研究組織及び支援基盤ができた。大学創立百周年、21世紀の直前という時期の象徴的な出来事だったのではなからうか。

これからも京大図書館が1日3千人、最大5千人の利用者の皆さんのみならず、茶目っ気たっぷりで悪さをする学生諸君からもこよなく愛される京大でもっとも快適な空間であって欲しいと願っている。

(たかはし かしわ：前附属図書館事務部長 現東京大学附属図書館事務部長)

## 附属図書館時代の思い出

古 原 雅 夫

附属図書館書庫掛として法学部図書室から2階の閲覧事務室に席を得たのは、昭和33年である。始めて館内特に新書庫と旧書庫の案内をして下さった鈴鹿さんには、この時以来特に書誌学や古文書学のご指導を頂き、今もってその造詣の深さに敬意を払っているのは、私だけのことではないと思う。

貴重書庫を案内して頂いて『兵範記』その他の重要文化財があるのに驚いたが、一方では『百万塔陀羅尼』という現存する世界最古の印刷物が所蔵されていることを教えてもらい、現物を目の当たりにして感激した。特に「陀羅尼」がいつしか豆本のルーツであると考えようになって、ささやかながら私の豆本収集を始める切掛けともなった。何時だったか薬師寺から唐招提寺へ歩いた際、とある骨董商で明治期に複製されたという「百万塔」1基と「陀羅尼」(相輪と六度)2巻を購入したのは間も無くであった。ちなみに「陀羅尼」は『無垢浄光経 陀羅尼摹本』と桐箱に墨書があり、中には唐辛子が2コ入っている。

また貴重書庫には帙のない書籍が多くあるとのことで、正式の帙ができるまで簡易帙の作成を西谷さんに教えてもらい、テープ状の材料等を購入。作成の上、背文字を下手法で書いたことも懐かしい。

「旧書庫へ行きましょう」と鍵を持たれた。南京錠？を開けて鍵を差し込んだままにして金具に掛けて中へ入る。その仕草が余りにもスムーズなのに思わず笑ったが、その後は私もそれに習ったものである。1階には中扉(防火用)があり、頑丈な鉄の引戸で重く、それを開ける時には両手に片足を梃子の応用にして開けられたのが、これまた可笑しく思い出される。そしてこの扉は必ず閉めることと付け加えられた。

旧書庫の3階には「蔵経書院文庫・日蔵既刊本、同未刊本」があることを教えてもらったが、のちにこれらに紙魚を発見し、夏の暑い時期に

移転や点検・駆除に騒動したものである。このことが切掛けになったのではないが、『事務分掌規程』に「書庫及び書窓開閉…」とあったように、鉄格子の窓外に鉄の開きが何箇所もあり、以前から晴天の日は通風のため朝夕開閉していたことも今では懐かしいことである。

書庫の2階・3階へは段差の高い階段があり、一気呵成に登ると息が切れるほどであったが、図書を2・3階へ運び込むために階段近くの床に四角の穴が開けられ、3階の天井から旧式の滑車で1階まで籠が下げられる。図書を入れて「エイヤコラ」と上げるのがこれまた重く額に汗をしたものである。当然ながら1階から乗るのは図書のみで、人間は上と下に分かれての図書運搬用であり、その時の声が今も聞こえるような気がする。

次いで『江戸期京都書肆出版書目録』の作成を思い立ったことである。法学部図書室でも知ってはいたが、新書庫で『慶長以来書買集覧』や『元禄太平記』等と出会って、京都が書商ひいては出版の発祥地であることを知り、先ずその出版状況を把握すること。それがいずれは庶民の読書傾向を知ることにつながるのではないかと考えて、個々の刊本をカード化しようと始めたことである。折々にまた学内外で出版された図書目録を借りて帰り、家での作業がほとんどであったが、カード目録の配列は屋号を主類とし、名前を主綱、更に要目を年代順にして約15,000枚のものができた。これらは最近まで目的を達することなくわが家の押し入れで眠っていたが、この度落ち着く先を得て心から喜んでいる次第である。

おわりに書庫は多くの図書館職員が汗した、奮闘の歴史的集約の跡である。そしてそれは活用の一つの源でありまた兵どもが夢の跡でもあるとしみじみ思うのである。

図書館の思い出は多くの人が持っており、またその人達は図書館外史とでも言うべきものも

持っていて、それらは枚挙にいとまがない。いずれにしても、ある時代を歩みそれを語る人は少なくなってゆく。附属図書館創立100周年

記念のこの時期に、『静脩』の臨時増刊号が出されることを心から祝福して終わりとしたい。

(ふるはら まさお：元教養部図書館整理掛長  
元武庫川女子大学附属図書館図書課長)

## 昭和20年代の図書館

河 本 芳 子

### 1. 古典籍の整理

本館の古典籍は概ね公家の歴代伝襲の蔵書や、個人の収書、所謂特殊文庫の中に含まれている。これらの文庫の内容や価値は『京都大学附属図書館六十年史』に詳述されている。私が多少なりとも整理に関与した清家文庫は前者で、谷村文庫は後者である。

清家本は殆どが写本である。写本は書写年や筆者、それも自筆か他筆かの判断が難しい。奥書や料紙その他から決め手が得られなければ推定が不明になってしまう。清家本の貴重書を整理中、突然、伊藤祐昭さん(注1)が「清原宣賢の字は判った。クキクキツとした字だ」と言われた。クキクキツと言われてもどんな字が判らない。見るとなるほどそれしか言いようのないピッタリの表現であった。いくつかの宣賢筆と思われる本を比較して得られた直感である。他の条件と矛盾しなければ直感も判断の一助となる。また署名があってもそれは筆者でなく、その本の所有者を示すものだったこともある。

書写年が干支のみで書かれている場合は、年表を見てその干支に該当する年を求めねばならない。奥書も元となった前の写本のものがそのまま転写される場合もあり要注意である。

古写本の整理は難行苦行であるが、時には副産物もある。清家本には清原家の家学を宮中で御進講した際の原稿本があるが、その注釈の部分は口語で、仮名は片仮名が用いられている。これによって、当時室町期の口語や片仮名の字体(例えばマは現在のマ)などが分かって興味を引くこともあった。

清家文庫の貴重書が写本であるのに対し、谷村文庫の貴重書は古版本である。谷村文庫は先

に貴重書が的屋勝さん(注2)によって整理された。その目録カードを見ると綿密、整然と記されているのに感服する。たとえば一行 字、  
行の如く、我が国古版本を類別するのに必要な字数、行数が克明に記されている。

宋版は整っていて美しいと言われているが、それだけでは具体的にはわからない。一見に如かず、見てはじめて会得できる。

漢籍を整理する際には、序文を読んで理解することも大切なので、漢文が読めなくてはならない。そこで人文研の鈴木隆一さん(注3)や文学部の竺沙雅章先生にご指導を仰いだ事もあった。

古典籍の整理には書誌学の知識が必要であることは勿論であるが、写本、版本を問わず古書に数多く接して実物を見る経験を積むことが大切である。

### 2. 和漢書目録規則

京大図書館では、法・経・文の三学部の図書は、本館の受入図書原簿には登録するが、本館へ本を運ばずに学部図書室で整理し、作成した目録カードのみが本館へ送付されていた。これに対して他の部局図書は本館へ運ばれ本館で目録カード作成後に部局へ返還された。本館で作成したカードはすべて法・経・文のカードと共に、本館内の全学総合目録に繰込まれる。

情報社会の進展に伴い出版物が多量となり、大学でも図書が急増した。これを従来的人员で処理するのは容易でなく、整理の遅延を余儀なくされ、最終的には本の利用が遅れることになる。二、三の部局図書室から本の利用を早くするため、法・経・文同様に図書整理を行いたいとの希望が出された。本館で検討の後、中央図



書室のある部局に限り、要請があれば認めることになった。さて実施してみると送られてくる目録カードは、記入様式・記述が多様化して本館の総合目録に繰込難くミスファイルのもとにもなりかねない。引いてはカード検索も容易でなくなる。総合目録の整合性を保つためにはカード記入の統一が先決である。それには従来本館で伝承されている目録規則を成文化して、これを予め部局に提示し協力を求める必要がある。部局図書室と本館の目録担当者が一堂に会

して協議した結果、相互に同意し、承認して出来上がったのが、『京都大学和漢書目録規則』（昭和48年2月）である。

創立以来、先人の識見と努力によって築き上げられた本館の総合目録を維持することを誰もが願ったのである。

注1. 伊藤祐昭 のち附属図書館整理課長

注2. 的屋 勝 元滋賀県立図書館長のちに金沢女子大学教授

注3. 鈴木隆一 元人文科学研究所図書掛長

（こうもと よしこ：元附属図書館整理課和漢書目録掛長）

## 『国立大学図書館員に期待する

## 公立図書館員の立場から』再考

武 内 隆 恭

1988年度の全国図書館大会（宮崎）の大学部会で、上記のテーマで「国立大学図書館の一般住民へのサービスの公開」について発表した。『図書館雑誌』に「大学図書館の公開に思う」シリーズに上記のテーマで書いたのがきっかけである。

毎日新聞（1985.1.14）を手始めに一般市民から大学図書館の開放とその閉鎖性についての疑問がだされ、文部省学術情報課の回答（朝日新聞1985.6.9）は「可能な限りお手伝いができると思います。」と述べている。国立大学図書館協議会の「大学図書館の公開に関する調査研究班報告（『大学図書館研究』No.29、1986.12）では、「社会的状況の急速な変化、進展の中で...一般社会からの要求に対して消極的姿勢をとり続ける事はできない」と認識し、「一般市民等利用内規」の具体案まで示している。愛媛大学の公開の事例（『大学図書館研究』No.27、1985.12）があり、京都大学附属図書館では、「学外利用者内規」（1987.3）が定められ、公立図書館を通じ一般市民が公的に借りられる条件が整っていたことも紹介した。

さて、それから10年、どう変化、発展したのか。倉橋英逸氏（『大学図書館研究』No.40、1992.9）は、1970年代は、司書職制度、業務の機械化、学術雑誌の収集と整備、1980年代に

は学術情報システムの開発と全国ネットワークへの転換のための電算化、酸性紙と大学図書館の公開の問題を概観し、さらに「現物貸借」の制度の確立と館種を越えた相互協力（現物貸借を含む）の必要性」も強調し、「この協力関係が全ての図書館に拡げて行く努力が必要である」ことも加えている。地域別の図書館相互協力の一例として、『大学図書館研究』（No.42、1993.9）「館種を越えた図書館協力 福島県内大学図書館相互利用制度」で実践例がある。「図書館相互利用制度」に対して、新しく「図書館ネットワーク」の言葉が使い出された。それには、倉橋氏も指摘しているように学術情報センターを中心に、全国に結ばれたネットワーク網による書誌情報の蓄積がある。一方、公立図書館での1980年代から急速な業務の電算化が進んだ事も、相互協力への推進につながったと言えよう。柴田正美氏は「地域図書館ネットワークと大学図書館」（『大学図書館研究』No.46、1995.4）で「図書館ネットワーク」は「コンピュータと通信手段を用いた新しい図書館協力」と位置付け、1. 利用者が求める資料・情報の存在の把握、2. 所蔵図書館を把握する態勢、3. 要求された資料・情報を迅速に利用者の手元に届ける物流ルートの整備、を挙げている。1と2は各図書館の連携が大事であり、3

の物流ルートは、各図書館の考え方によるが、滋賀県では、資料提供の本質的機能から、図書館の責任として当然、費用の負担は図書館と考えられていた。柴田氏は、「地域図書館ネットワークに大学図書館が参加することは、大学の「地域開放」を意味し、大学のもっている多くの資源を利用した「地域貢献」と言うことができるであろう。」とまで強調している。私が、3年前に広島、岡山、山口、福岡、大分、熊本について直接にたずねたが進展していなかった。1996年10月に『大学図書館研究』が「第50号記念特集号」を組み、この中の「各論5．利用者サービス」で、吉田憲一氏が大学図書館の公開のこれまでの経緯を述べ、1．公共図書館などとのネットワーク作りへの参加と、2．インターネットを通じた大学図書館のもつ特徴的

な蔵書の公開である、として、基本的に柴田氏と同じ見解を述べている。

大学図書館の地域住民への公開は国公立、私立を含めて拡大していることは事実である。私立大学図書館の公開は早くから行われているが、数年前から登録料（3000円程度）を取って公開する方向があり疑問がないわけではない。私の望みはあくまで現物貸借で、地域住民の利用者本人が大学の窓口まで行かなくとも、公立図書館を通じて手許に届くシステムの確立と、それを公的に認める規定の整備をさらに望みたい。電子図書館だけに目を奪われるのでなく、地味な道であるが地域住民への公開のためにも目をむけて頂きたい。

（たけうち りゅうきょう：元教養部図書館整理掛長  
前京都橘女子大学教授）

## 揺籃期の参考掛員として

大澤 紀子

昭和36年4月、附属図書館は部課制の実施に伴い、従来の運用保管部参考掛が閲覧課参考掛と改められ、本来の参考業務に専念し得る体制が整えられた。掛員2名（尾崎富美枝さんと私）は、従来は外国雑誌の受付、国際交換、文献複写の受付等を主な仕事とする中で、レファレンスワークを行っていたのが実状であった。

まずは参考図書の整備が急務であった。各目録掛長の援助を得ながら、庫内に眠っていた参考図書類を発掘して開架し、充実に勤めた。昭和42年、参考図書室の拡充に伴い、より組織的に整備することが出来た。

当初の手探り状態のレファレンスサービスからはじまり日常寄せられる質問に真摯に取り組み、何とか利用者の要求を満たしたいと努力する中で、レファレンスサービスに対する認識、資料知識、探す手段も暫時身について行った。長沢雅男著『参考調査資料解説』（昭和42年刊、10-25-サ5）等是有難い指針となった。

当時のレファレンスサービスの主なものは研

究者からで、国内外の文献所在調査とその入手、及びその方法であった。しかし、単なる所在調査といっても、当時は全国書誌も不十分で、そう簡単にはすまなかった。ある時、国書総目録に京大蔵と記載され、京大以外にはない唯一の図書、どう探してもみつからずその形跡も見当たらない。何故京大と記載され、何故今は無くなっているのか、それだけでも調べ、回答しようと追求して行くうちにその経過をほぼ辿ることが出来、現在は岡山大学に所蔵することをつき止めた。また、カード目録上は欠本とされている図書を庫内を探索し、要望していた利用者の手元に届けることが出来た。両者ともその喜びは大きく、これが無ければ研究に支障を来すところであったと大変感謝された。同時に我々も大いに報われ、達成感を味わうことが出来たのである。

現在、所蔵調査手段には格段の進歩があり、今述べたようなケースは、手作りのレファレンスサービス時代の事かも知れない。引用文献等



から、嘗ては京大に所蔵していたという事実も、今はその痕跡を辿る事は難しくなっているであろう。またその必要はないことも知れない。

学生からの質問は、レファレンスサービス一般に通じるものであったが、その特徴とする所に、時の政治、社会情勢を反映した質問が寄せられるので、我々は手廻しよく、これに対応する速報的資料を用意するように心掛けた。質問の仕方の下手な学生の要求点を適格に捉え、アップ・ツウ・デートに対応するため、参考掛員として、時の情勢に敏感でいなくてはならなかった。なお、日本図書館研究会、大学図書館研究会をはじめ、様々の研究会への参加、特に政治、社会の現状の要点を把握するに際して、労働組合に参加する図書館員であったことも役立った。

参考掛としてはもう一つ大きい仕事を抱えていた。春秋に附属図書館として催す展覧会の準備であった。企画、資料の選択、解説、ディスプレイ等々。企画については、参考掛だけでなく、課長、和・洋の目録掛長、中でも庫内の図書に精通しておられた鈴鹿蔵書庫掛長は無くてはならない存在であった。当時の有本課長は国立博物館に在職しておられた方なので、資料に対する知識だけでなく、書籍・巻物・軸物・刀剣などの取り扱いを紐の結び方にいたるまで具体的に御教示頂けた事は、殊の外有難かった。当時は書誌、蔵書に詳しい館員の方がおられたので、大半の展覧会は図書館員自身で企画、開催することが出来た。勿論、企画内容により、

専門の教官方の御指導を仰いだり、部局図書室にも御協力を御願いすることも多かった。

参考掛に直接かかわることではないが、利用者である教官の方々との交流から、館員側からお願いしたり、時には教官から、館員の資質向上のためにと講師のお申出をいただき勉学する機会に恵まれた。

野間光辰先生に『たまかつま』他。藤本幸夫先生に『朝鮮語』、竺沙雅章先生に『書林清話』、人文研図書室の鈴木隆一氏に『古文真宝』等講義して頂いた。その他にもロシア語、館員同志の学習（ドイツ語、宮内庁書陵部蔵の源氏物語等）も行っていた。いずれも時間外、有志の集まりではあったが、参考の仕事に大いに役立った。参考掛として、学内外各層の利用者に対応した経験は、後に目録掛に移り、目録を作成する際に、この情報は利用者にとって必要かどうかという観点が働き、目録記述に反映する姿勢が培われた。

長い図書館勤務の中で、特にレファレンスサービスに従事した事により、資料に対する興味を深め、また直接利用者に対応する中で図書館員としての自覚と喜びを飛躍的に高める事が出来たのは有難いことであった。レファレンスワークの仕事は常に図書館員である自分にとって勉強であった。一言付け加えるなら、それは苦痛でなく、推理小説の謎を解く時の喜びに似て楽しくもあった。

（おおさわ のりこ：元教養部図書館参考調査掛長）



昭和35年頃の文献複写室  
受付カウンター



オザフィックスという  
青写真による複写  
（昭和35年頃）

## 書庫の明け暮れ

中 村 久 藏

今年、附属図書館が閲覧業務開始100周年を迎えるに当たり、『静脩』臨時増刊号の原稿を依頼されました。提示されたテーマは私にとって実には射たもので大変恐縮しております。

私は昭和27年5月に附属図書館受入掛に就職しました。其後、文学部、教育学部、附属図書館、経済研究所と平成7年3月に文学部を定年退職するまで43年間、図書職員として勤務させて頂きました。今回のテーマ「書庫の明け暮れ」という言葉をきくと、私は何とも云えぬうら淋しさと、くたびれたものを感じるのです。この事は、私が京大に初めて就職し、勤務した附属図書館での3年間の「貴重な経験」が心に残っていたからだと思います。当時私の附属図書館受入掛での主な仕事は、図書の受入と、受入した部局図書の内本部構内以外の農学部、東洋学文献センター、教養部等の図書を配達することでした。その作業は月1～2回で、運搬用のトラックを本部事務局から運転手と共に受入掛に回してもらい、両端に荒縄のようなひものついた木箱や、パイル製の箱に毎回20箱余り図書を詰め、それを荷台に積み上げ、先輩や用務員さんと荷台に乗り込んで配達しました。この作業は事務局の都合もあって、小雨でも決行されることがありました。車の運転手は、当時定年制もなく、今から思うと70才に近い白髪まじりで丸刈頭の小柄な方でしたが、小雨模様の日の配達の時などは、年のわりに荒っぽい運転をされ、荷台に乗っている私達はしゃがみ込んで車体にしがみつくという恐怖を感じたこともありました。この様な仕事の他に、私にはもう一つの任務がありました。それは毎朝出勤する、一番先に旧書庫の入口の扉と庫内の窓を開け、夕方5時前になると、開けた窓と入口の戸締りをすることでした。この書庫は附属図書館の北側200mほど離れたところにあり、今の総合博物館の敷地内にありました。この建物は大正時代に建てられたもので、間口は約7～8m、奥行きは南北に60～70mの長方形の建物でした。屋根は瓦ぶきで二棟が渡り廊下でつながっていました。入口は南側の1棟と北側の2棟の一つづ

つあり、通常は南側の入口を使用しました。書庫内の壁はレンガを積み、それを漆喰で塗り固めた部厚い壁でした。1棟めの書庫は内部が2室に分れ、仕切りはコンクリートの敷石にレールがあり、重量のある鉄の引戸で開閉しました。窓は各室共西側と東側合わせて8ケで、三重式となっていて、一番外側が鉄扉で次に鉄格子があり、最後の内側に上下に開閉する木枠のついたガラス戸が取り付けられていました。庫内の照明は中央通路の高い天井に、1m程の間隔で円形のガラス笠をつけた丸電球でした。書架は木製で背丈程の高さのものを二重に積み上げた設計で、重ねた部分と下の書架の基部は金具で床に固定されていました。庫内は窓を開けていてもいつも湿気と埃りを含んだ匂いがしていました。特に2棟目の庫内は、貴重書や骨董品等が多数所蔵されていたので、樟脳など、防虫剤の強烈な匂いが充満していて、30分もいると目がちかちかして、頭痛がしました。

受入掛3年目に2階の閲覧掛に配置換となり、その後1年間閲覧業務に従事しました。閲覧掛員になって、朝夕の旧書庫の戸締まりの任務は用務員さんに引き継がれることになりましたが、閲覧掛での旧書庫の図書の利用が意外と多く、書庫が離れているので、その貸出利用は午前2回と午後2回とに制限されていました。しかし本館から200mも離れた旧書庫からの図書の出し入れは大変でした。その当時はリフトやエレベータもなく、特に雨降りの時期は明治や大正時代の製本された新聞の利用があると、リヤカーにシートをかぶせ、傘をさして運ばねばならず、限られた利用者には庫内で利用させることもありましたが、書庫内の図書の管理面もあり、通常の利用にはやはり本館の2階の閲覧室で利用させることになりました。閲覧掛員になって、朝夕の旧書庫の戸締まりの任務は解放されましたが、其後1年間旧書庫の明け暮れで過ごすことになりました。今ではほんとうに懐かしい思い出となっています。

(なかむら きゅうぞう：元文学部閲覧掛長)

## 職員の研究活動

柴田 正子

私が京都大学へ就職したのは1962年です。農学部へ2年、附属図書館の洋書目録へ16年、法学部へ18年間在職しました。附属図書館にいた当時（1965年頃）は、大学紛争などで騒がしく、個人的にも、結婚、出産、育児と忙しくむなし日々が何年か続きました。1975年頃からやっと落ち着きを取り戻し、5～6人のグループで土曜日の昼から2時間ほど目録の勉強会を始めました。これは、丸山 昭二郎著『目録法と書誌情報』をテキストとした目録に関する基本的な学習でした。この時、「目録原則国際会議」の覚書（パリ原則）を原文で読んだことがあります。皆と一条一条議論しながら読んでいく楽しさは今でも思い出に残っています。一方、職場では、目録の機械化や、英米目録規則の改訂などが話題となり、その為のマニュアル作りと学習を目録掛としてやってきましたが、全体的には、館員の研修は貧弱で不満とあきらめムードは続いていました。

1980年代に入り、京大職員組合は「職場と仕事の見つめ直し」「働きがいのある職場作り」という基本方針をうち出しました。これをうけて図書館部会では「図書館学校」を開催することになりました。毎月1回、昼休み、日常業務をやっている図書館員が講師となり、現場での問題点、参考にした文献の調査方法および紹介、見出した解決法と結果、という基本線に基づいて資料を作成し、報告するといった形

式で行われました。ここで取り上げたテーマは下記の通りです。

以上のように、テーマは図書館学全般にわたるものであると同時に、報告者も全学部に及ぶものでした。内容もかなりアカデミックなものから、実務に即役立つものまで、資料も大部のものもありました。参加者も毎回京大全図書館員数の15%が出席し、盛況の内に終わりましたが、報告者、参加者ともに図書館員にとって自己研修・共同研修が十分出来、自らの仕事を再検討するきっかけになったと思います。この影響で全国大学図書館職員の研究組織である大学図書館問題研究会では「大図研学校」が数年続き、京大の中にも、[ MARC学習会 ]、「参考図書研究グループ」、「理工学文献研究会」など、数々の研究グループが誕生し活動してきました。この1980年代はまさに図書館員の自主研修の花盛りであり、私にとっても思い出深い十年間となりました。1990年代には官製の研修会が開かれるようになり、参加する機会も増えてきましたが、まだまだ十分なものとは言えません。

私は、図書館員の研究活動は自主研修が基本であるべきだと思います。図書館員一人一人が問題をもって集団で解決していく姿勢が大切ではないでしょうか？ こうすることによって自分の仕事に対する意欲が向上し、集団としてレベルアップしていくと思います。

（しばた まさこ：元法学部図書室整理掛）

回次	テーマ	報告者（部局）	参加者数
第1回	分類（図書館学）の展開を巡って	片山（附図）	28名
第2回	図書の収集と選択法に関して 選択の方法と実態	堤（経）	40名
第3回	利用案内 法学部図書室の経験から	伊藤（法）	45名
第4回	二次資料について その解題と使い方	船越（経）柴田（法）白神（工）	56名
第5回	学術雑誌の管理・運用について	林（工）	33名
第6回	医薬学関係図書解題 二次資料シリーズ・パート2	篠原（医）	36名
第7回	Citation Indexについて SCIの構成	柴田（法）	46名
第8回	資料提供サービスについて	水野（医）	29名



## 新館建設について思うこと

松 田 榮 博

新しい図書館の建設に携った一人として、本部キャンパスの建築群の中であって、ひときわ堂々たる風格の図書館を見るにつけ、さまざまな思いが甦る。

この図書館建設について特筆すべきことは実に多い。そのうちの一つは、林館長時代の運営改善に関する委員会、施設・サービス委員会における「新営計画」の策定過程において、また、同計画に基づく具体的な実施計画を検討するにあたって、多くの館員が参画し、ライブラリアンとしての知恵や意見が大きく反映されていることである。

限られた敷地の中で、与えられた資格面積を有効に活かし、しかも、今後の図書館活動のあり方・すすめ方等を勘案して具体的にどのようなものにするか、「新営計画」の策定には長期間を要している。私は図書館の全面建替えが認められ、図書館商議会が「新営計画」を確定した直後の昭和56年4月に附属図書館にお世話になり、建築計画の検討に参加したが、図書館業務との関係、構造上・技術上の問題、建築費とのかかわりなどを含め、全体の問題を調整して「一つの図書館」にまとめることには、たいへん難しいものがあることを知った。館内の意見の聞き役であり、施設部との打ち合わせに当たった私にとっては、ご専門の立場で種々ご検討をいただき適切なアドバイスをいただいた施設部の方々のご好意が忘れられない。その後施設部によって「建築計画」が確定され、富家建築事務所により仕上げられた詳細設計をもとに戸田建設株式会社が昭和56年12月に着工、昭和58年10月20日待望の図書館が完工したが、当時の館員の観智が随所に込められた「名建築」であると私はひそかに思っている。

なお、当初「現地建替え反対」の動きが館内外にあった。建替え期間中のサービスの低下は許されないのご主張は貴重であるが、一方、現存する図書館を残し、別の地に新しい図書館

を建てることにすれば資格面積が少なくなること、大学の発展のために、情報化時代にふさわしい豊かな機能をもった図書館をつくる必要であることなどを話し合い、ご理解いただくところとなった。管理的立場にある者の説明責任（accountability）の大切さを痛感するとともに、このことにより、全館挙げて図書館建設並びに移転期間中の業務を恙なく遂行していくには、新館建設について透明度のある枠組みや方向性を示すことが重要であると考えた。将来の図書館活動に備え、利用者にとっては勿論のこと、館員にとってもすばらしい図書館をつくることへの共通の理解と認識あるいは暗黙の了解があってこそ、全館員が汗して取り組むことができたのではないかと考えている。

今にして思えば、学内各所への事務室・閲覧室・蔵書50万冊の移転は実に大変な作業であった。移転先での業務の遂行は不便であり困難をきわめたとし、利用者各位には多大のご迷惑をおかけした。旧館取り壊しにつぐ新館建設の着工から竣工・館内設備の整備に至るまでの間、さまざまな問題への対応に明け暮れたが、やり甲斐のある日々でもあった。かくして建物面積が約3倍に増大し、内容を一新した新館への再移転、1日も早くと思う心ばかりがやはり過酷な労働となったが、屋上からみた四周の景観は、これまでの疲れを癒してくれるすばらしいパノラマであった。昭和58年10月29日の竣工披露、そして昭和59年3月21日の開館記念式の挙行と事は運んだ。すべてが日常業務をこなしながらの大仕事であった。

ここで建設事業にかかる経費面に言及しておきたい。二度にわたる「移転費」の確保には若干の工夫が必要であった。「建物新営特別設備費」については、「世界各国の方々に見ていただくことになるので立派なものにしてほしい」と、ほぼ要求どおりの予算を認めていただいた。経理部の方々の図書館づくりへの思いに熱いものを感じ、

閲覧機の一つを選ぶのにも心を砕き、館員の意見を取り入れながら館内外の整備に努めた。

次に「図書館運営費」の確保は、新しい図書館の命運にかかわる重大事であった。建物規模の拡大と設備の充実、さらに図書館の果たすべき諸機能の整備充実に伴い、従来にない図書館活動が展開されるので、それに見合った多額の運営費を必要とすることは必定である。高村館長ご就任直後の昭和57年4月からこの問題に取組み、昭和58年4月開催の京都大学評議会が昭和58年度の歳出予算配分方針を決定するに際し、新図書館の運営費の増額分に対し、全学的見地に立った予算措置を講じていただくことが決定され、新館が竣工する昭和58年度以降の図書館に対する予算配分の基本方針が確定した。これらのことについては、稿を

改めて語りたいことがある。

昭和59年4月9日、新しい図書館システム、サービス体制の下で図書館は全面開館し、多数の入館者で活みなぎる日々が始まった。「京大の館員の目が輝いている」とは、当時の東京大学図書館長裏田先生から頂戴したお褒めの言葉である。

その後も図書館業務の電算化など、西原館長の下で図書館機能の充実を目指す館全体の取組みが続き、新しい図書館の形が整えられた。林先生・高村先生・西原先生三代の館長の下で全館員が奮闘した図書館づくりは、大学の将来を見越した歴史的な大事業であった。

(まつだ よしひろ：元附属図書館総務課長  
現財団法人京都大学後援会事務局長)

## 新館建築の思い出

金 井 孝

「京都大学の長い間の夢の一つが、美しい装いと豊かな機能をそなえた図書館として、いよいよ開館の運びとなりました。まことにご同慶にたえません。読みたい本がほしいと思う時に手に入り、希望の文献が手際よく検索でき、書庫内で自由に拾い読みして思わぬ本や文章と出会い、妨げのない環境で読書と思索にふけり、また分野を越えた学問の交流の場が提供される、大学人のこんな夢を満たせる図書館でありたいとの希いが、新しい図書館には籠められております。」昭和59年3月21日、新図書館の開館記念式における高村仁一先生の式辞はこう始まっている。式辞の草稿は、松田栄博総務課長が熱き想いをこめて作成した。関係者一同がこの図書館に託した理念や施策にはじまり、新館建設にいたる経緯、建物の規模、特色を述べ、各方面に対し謝意を表明する、かなりな長文である。

前日も遅くまで、館長お得意の「夜道に日は暮れず」という科白が聞ける迄、文案を巡って鳩首凝議が続いた。「ご同慶にたえない」は第三者の言葉で、当事者が言うのはおかしいと言

い張った私に、「慶びを同じうするのだから」これでいいのだと応えられた先生のお顔が、今も目に浮かんでいる。起草者の文章を大切にする心配りと、全員でこの慶びを共有したいとのお気持ちが如実に窺われる温容であった。

少し笑みをたたえて、ゆっくりと、昨夜最後の仕上げをした文章と一言一句違わず、句読点までが見えるようにご挨拶が進み、関係者の名を列挙し謝意を述べられる先生の手に、草稿は無かった。様々な数値や固有名詞を含む、長い文章を完全に記憶されるため、昨夜は睡眠時間を削られたに相違なかった。すべてを脳裏におさめて式に臨むという、先生一流の誠意の表現である。図書館の新営に関った全ての人々、式辞中には言及されていない「身内」である職員や、炎天下に汗したアルバイトの学生一人一人を含む全員に対する感謝の表現でもあった。息をつめて、自分たちの夢が、肉声となって、語られるのを聞いた。涙滂沱であった。

15年たった今、改めて読み返して見ると、この式辞には新しい図書館が目指したすべての事



柄や、これに携わった人々の熱気が凝縮されていることがわかる。新館建設に関ったものには、一読あの日々が甦る美しい文章である。

京都大学附属図書館の新営は旧館の取り壊し、現地建替えと言う厳しい条件のもとに行われた。旧館を残したままでは、資格面積から旧館分を差し引いた、比較的小規模な新館しか建設出来ないことから、将来を見通し、あえて選択した厳しい道であった。建物の取り壊しから新館の完成迄のほぼ3年にわたる期間、利用者の不便を最小に止めることを至上命令として、約50万冊の蔵書の殆ど全てを利用可能な状態で学内各所に仮移転すること、開架図書室は改装した法経第一教室に移し、一週間以内に再開すること等々が求められた。この無理難題とも見えた課題も全職員の「火事場の超能力？」と、学内各部局のバック・アップによって、無事乗り越える事が出来た。次々に困難な場面に遭遇

した職員が、日常業務では隠されていた能力を発揮し、緻密さが要求される事には緻密に、素早く対応すべき事には素早く対応する様を目の当たりにする、驚きと感動の日々であった。学内の所々・方々に分散・移転した図書を、日に2回集配する職員が、雨の日、我が身は濡らしても本は濡らさぬようしっかりと抱え、傘を傾けて歩いていた姿にこの日々が象徴されている。

昭和59年3月、卒業式当日、一度も新図書館を使うことなく、仮の閲覧室で不自由な思いをさせた卒業生に、お詫びの意をこめ、新図書館を開放した。御両親共々館内を回り、思い思いに記念撮影をする人々の中に、退館する際「こんな図書館が出来るのだったら、留年すればよかった」ともらした卒業生があった。新図書館に対する最高の賛辞であった。

(かない たかし：元附属図書館閲覧課長

現流通経済大学図書館図書課長)

## 新館建築中の閲覧業務

井 狩 らく子

附属図書館閲覧業務100周年を迎えられ、おめでとうございます。

昭和55(1980)年7月附属図書館新営の概算要求が提出され、10月予算内示、翌年正式決定という大転換期の昭和55年5月、私は閲覧課閲覧貸付掛長を命ぜられました。以来、新営図書館業務の機械化等様々な経験をさせていただきました事に改めて感慨を深くしております。

程なく、職員の新営と、仮移転のワーキンググループが発足し、私は後者に属し、昭和56年8月1日から9月にかけて、その後の114日間の仮移転作業実施の為の計画・準備が始まりました。

閲覧貸付掛の最大の課題は、閲覧室と、利用可能な資料の移動計画等でした。

開架閲覧室は法経第一教室に決定しました。閲覧席200席、開架図書約2万8千冊(参考図書8千冊：参考掛)の書架設置、その他の移動

計画・準備が必要でした。古き良き時代の机と椅子は残念乍ら撤去され、決してすわり心持が良いとは云えない机・椅子が設置されました。開館してみると、9時前から学生は待っていてくれ、お互いに不自由を忍んでの利用だったと思いますが、日常的に満席でした。

利用対象の資料として、本館書庫の約27万冊の図書・雑誌の移動が当掛の担当でした。過去の利用統計から、利用率の高いものは法経新館地下書庫へ、漢籍関係は東洋学文献センターへ、利用率の低い資料は旧書庫等へと配架する為の結束準備、出口と配架先の棚番張り、配架後の点検等、猛暑の中連日行われました。ほぼ過不足なく配架は完了しました。利用可能な書庫内図書の利用は、1日2回対応していました。雨の日も、風の日も、冬の雪降る日もリヤカーにボテを積んでの作業でした。特に製本雑誌の利用が多い時、担当者は大変でした。経済学部

閲覧掛の皆さんには、電話の取り継ぎ、図書館職員の出入り等色々御協力いただきました。東洋学文献センターに配架した図書の利用はセンターの方に直接対応していただく事が出来ましたので、利用者共々大助かりでした。

昭和56（1981）年12月図書館新営の入札が終了し、翌年1月解体が始まると、新営図書館の為の計画・準備が本格化しました。閲覧貸付掛では新図書館の閲覧スペースに図書8万冊、座席800席の備品の計画、サービス集中化に伴うカウンターと、カウンター周辺の設計、ラウンジ等の備品の計画 etc. 特にカウンターについては、ワーキンググループ、施設部との間で、機能性をとるか、見た目をとるかで激しいやりとりがあり、現在の姿になっています。

新営の基本構想の重点課題であった機械化への準備も急がねばなりませんでした。貸出・返却を機械化する為、図書にID番号を貼り、対応する図書の書誌情報を入力しなければなりません。開架予定図書5万冊の図書カードをコピーし、それに掛員全員毎日超勤によって必要事項を記入しました。これを基に書誌情報の調整を行なう為、和・洋の目録掛と何度も何度も打合せを行ないました。更に、全面開放に近いサービスを提供する為、Book Detection Systemが採

用されました。図書にタトルテープを装備し、一方全学生・全院生（約2万名分）の利用者証を作成しました。作成に当っては、学術情報掛が担当して下さいましたが、図書IDの貼り付けや利用証の点検等は当掛で行わねばなりません。

こうして、昭和59（1984）年4月開館の運びとなりました。全学学生の利用者証の発行にも並々ならぬ神経を使わねばなりませんでした。入館機も開館当初は色々問題が起り、担当者はその都度走らねばなりませんでした。新営開館第一日も夢の様に過ぎました。

昭和60（1985）年私は和漢書目録掛へ配置換になりました。全国目録情報のネットワーク化が開始されたところでしたので、ここでも目録の電算化について勉強が必要でした。

思えば、これらの事はもう15～20年も前の事になりました。もっと大変で、大切だった事も抜けているでしょう。当時共に仕事をした図書館員の皆様はじめ、御協力いただいた部局の皆様に改めて、心より御礼申し上げます。そしてこの機会を与えて下さった事に感謝いたしております。図書館のますますの御発展を祈念申し上げます。

（いかり らくこ：元附属図書館総務課専門員）



新館建築中、法経第一教室が仮閲覧室となり、常に満席の状態であった。

## 「機械化」初期の頃の思い出

隅 田 雅 夫

私が京大に就職したのは昭和52年3月のことで、ちょうど「機械化」が図書館の職場に、いろいろな意味で少なからぬ影響を与えはじめた頃だったのではないかと思います。「機械化」という言葉は、図書館ではもう死語に近いものとなってしまいましたが、いわゆる「電算化」のことであり、今では「システム化」「情報化」などの方が一般的でしょう。しかしその頃は、電算化の検討委員会も「機械化委員会」と呼ばれていました。

私は昭和23年生まれですから新人とは到底言えない年齢で、いわゆる中途採用だったのですが、就職してまもなく当時の課長からCOBOLの研修に行くように言われ、私を含め3人が大阪の堂島にあったF社に2週間通勤しました。1週間は初級、1週間は中級（入門、初級だったかも知れませんが）で、私にとっては初めてのコンピュータとの出会いでしたが、プログラミングはそれなりにおもしろいものだと感じました。

当初の「機械化」は、全国的にも共通だったと思いますが、前金払い外国雑誌の予約、契約、支払等の帳票作成処理でした。いわゆるバッチ処理（これももうあまり使われない言葉ですが）方式で、数千件のデータをパンチカードで入力し、連続用紙に帳票を印刷出力するというものでした。また、プログラムも当時はパンチカードで作成していました。プログラムの1ステップが1枚のカードにあたり、プログラムによっては数百枚にもなる場合があって取扱いが大変だったことを思い出します。

これらの作業は、いわゆる全学の図書系職員数名からなるワーキング・グループ（WG）で行なっていましたが、「機械化」は、職員の間では図書館当局側が一方的に推進しているという不安があったようで、あとで聞いた話では、WGの設置や運営について職組と図書館当局とでいろいろな話し合いや交渉があったようです。私が研修のあとWGに参加した頃は、さま

ざまな紆余曲折のあとの少し落ち着いた頃だったのではないかと思います。

このような新しい技術の導入をめぐる労働現場での確執は、どんな職種においても避けられないことですが、図書館における今日の情報技術利用の目覚ましい進展を考えると、当時の職員の不安は無理もないことだったと思いますし、職員の側も情報の公開が十分にされないことの不安が大きかったのではないかと思います。

ただ、当時を振り返ってみると、図書館にとってコンピュータという新しい情報技術がどのような意味や影響をもつのか、という観点からの冷静な議論が少し足りなかったのではないかという思いもします。これはその当時に限った問題ではなく、現在も常に問われ続けなければならないことですが、そのためには、やはり新しい知識や技術を熟知し、使いこなしていく力を、集団として身につけていくことが必要なのだと痛感します。わかりきったことを今さら何を言うのかとお叱りを受けそうですが、こうして当時を振り返り、それから20余年を経て飛躍的發展をとげた今日の情報技術やネットワーク社会を思うとき、やはりそのことの重要性を改めて感じる次第です。

当時からの「機械化」の推移を回想しているとさまざまなことが頭に浮んできますが、その後もLC-MARCデータの処理や図書館専用電算機の導入などに関与させていただきました。私がコンピュータに関わってもっとも留意したのは、コンピュータ知識やプログラミング経験者の裾野をできるだけ広げて行くことと、いま現場でやっていることをいろいろな場で説明していくことでしたが、いろいろ批判も受けました。いずれにしろ、今では図書館だけでなく多くの職場で当たり前の知識・技術となってしまいましたが、やはり「機械化」初期の頃はたいへんだったなあ、というのが率直な感想です。

（すみだ まさお：元附属図書館情報管理課専門員  
現三重大学附属図書館情報管理課長）



# 京都大学電子図書館システムの現状

朝 妻 三代治

## 1. はじめに

平成10(1998)年1月に動き出した「京都大学電子図書館システム」が、この11月で1年11ヶ月を経過しました。徐々に充実しつつあるこのシステムに、構想当初から関わった多くの皆様方の努力に心から敬意を表します。

「机の上に京都大学」「京都大学エンサイクロペディア」つまり、机の上にネットワークに繋がったコンピュータがあれば、世界中から京都大学が見えるという発想は大胆ですが、見学者の方々に説明をする度に「なるほど」と実感しています。

諸先輩達に感謝の意を込め「京都大学電子図書館システムの現状」を報告いたします。

## 2. 電子図書館への主なあゆみ

昭和60(1985)年	中型汎用機による電算化業務開始
昭和61(1986)年	調査研究室開設(館内措置) 文献情報センター目録システム参加
平成2(1990)年	KUINS(京都大学ネットワーク)第一期整備 OPAC開始
平成6(1994)年	「吉田松陰とその同志」展で「Ariadne」(電子図書館実験システム)による電子展示
平成7(1995)年	「蔵経書院本目録データベース」「維新資料画像データベース」作成 KUINS第二期整備
平成8(1996)年	京都大学附属図書館ホームページ公開 研究開発室設置(学内措置) 「今昔物語集への招待」展をインターネット公開
平成9(1997)年	電子図書館専門委員会設置

京都大学百年史をインターネット公開

平成10(1998)年 電子図書館システム稼働業務システム、オープンシステムに移行

## 3. 京都大学電子図書館システムのコンセプト

電子図書館システムは4つのコンセプトで成りたっている。

- 1) 情報の発信(京都大学の情報を世界中へ)
- 2) 情報の配信(学術情報を学内構成員へ)
- 3) 電子出版サポート(学内出版物を)
- 4) 高度な検索・ナビゲーション(使い易いシステムの構築)

## 4. 電子図書館システムの進捗状況 - 「机の上に京都大学」の実現に向けて -

### 1) 国内外への発信情報

国宝 今昔物語集 553枚

重要文化財 7,126枚

兵範記(自筆本・古写本)、兵範記(新写本)、知信記 範国記、古今和歌集、新古今注、易学啓蒙通釈、易学啓蒙抄、易学啓蒙通釈口義、古文孝経、孝経述議 御注孝経、蒙求、塵芥、三略秘抄、史記抄、拾芥抄、宣賢卿字書、大学、中庸 長恨歌并琵琶秘抄、万葉集(尼崎本) 命期秘伝、六韜、六韜秘抄、論語(枝賢筆)、論語(良枝筆)、論語義疏、聚分韻略

貴重書 7,194枚

國女歌舞妓繪詞、烏帽子折草紙、玉ものまへ、四十二の物あらそひ、付喪神、義経記、源氏物語、源氏小鑑、源氏小鑑源氏物語音楽之事、岷江入楚、岷江入楚岷江御聞書、源氏詞清濁、源氏清濁、紫明抄、仙源抄、幼学指南抄、天正遣欧使節肖像画、室賀コレクション古地図 48枚、富士川文庫セレクト、365冊

41,160枚

維新資料 約14,900枚

奇兵隊日記、維新資料人名解説データ、樋口一葉作品（この作品は、万波前館長のボランティアによる力作です。）

闇櫻、わかれ霜、たま櫛、五月雨、經つくえ、うもれ木、暁月夜、雪の日、琴の音、花ごもり、暗夜、大つごもり、たけくらべ、軒もる月、ゆく雲、うつせみ、十三夜、この子、わかれ道、うらむらさき、われから、にごりえ

その他 蔵経書院本目録 京都帝国大学

富士川本目録（古医学書）

部局、事務局への電子化支援

京都大学百年史 総説編、部局史編、写真集

京都大学 - 研究・教育の現状と展望（総務部広報調査課提供）785頁

博士学位論文論題一覧（大学院審議会【平成10年11月24日開催】で了承済み）

Kyoto University Bulletin（総務部国際交流課提供）439頁 この提供により、外国からのアクセスが急激に増えた（主に米国等英語圏、韓国、台湾）

京都大学公式ホームページへのキーワード検索システムの提供

京都大学のトップ頁から15回以下のリンクを辿って到着するホームページ検索。

月2回ロボット収集。同義語、訳語検索が可能。

画像データは今年度で約14万枚提供の予定。

2) 学内向け配信情報

ネットワーク対応CD-ROM

CA on CD、MEDLINE、GeoRef、PsycLIT、BA、Zoological Record、雑誌記事索引、朝日新聞記事見出データベース、広辞苑、Oxford English Dictionary II .

電子ジャーナル（エルゼビア社 S-DOS）

35誌

外国語雑誌目次データベース（SwetScan）

約18,000タイトルの目次データベース（SDI = E-mailによる自動配送システム、オンライン複写申込み機能付き）

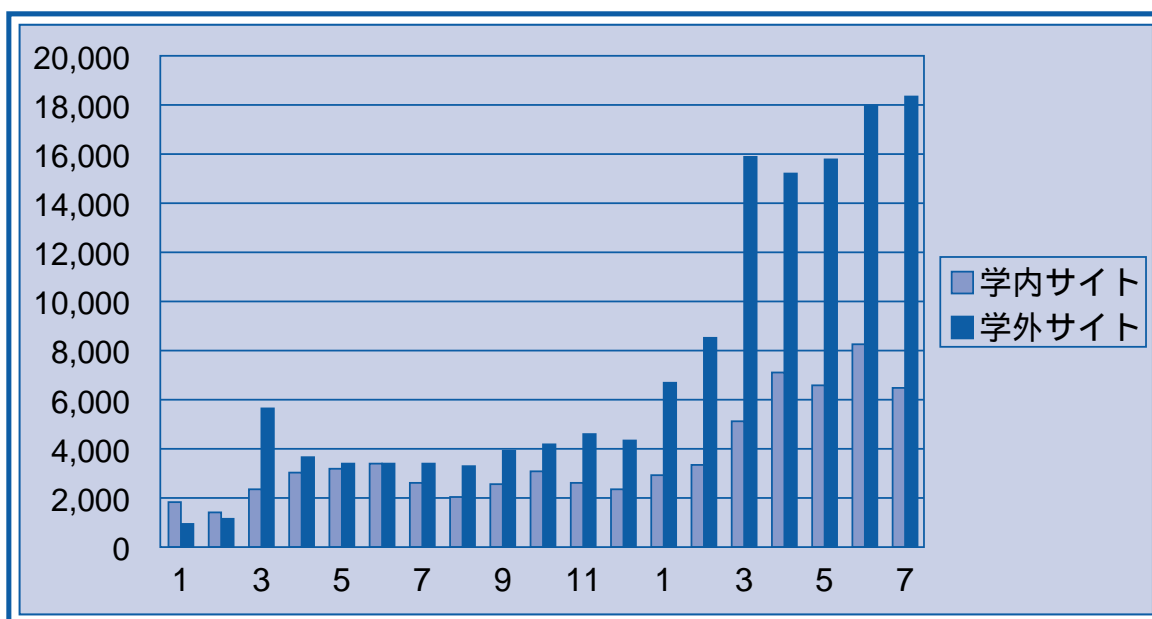
3) 効率的な検索、利用しやすい環境の整備

テキスト系コンテンツを、全文、同義語、訳語検索システムを導入し効率的な検索ができるようにしている。また、図書のイメージで読める、付箋を貼る、必要な部分を朗読する、といった専用ブラウザを学内に配布した。

テキスト系データについては、自動翻訳機能（和・洋訳）が付いている。現在の翻訳能力は「高校1年生程度」といわれ、それほど信頼のおけるものではない。今後機能を高めたソフトウェアの開発・提供が重要になる。



## 4) 電子図書館利用サイト数 (1998.1 - 1999.7)



平成10年3月 オープニングセレモニー新聞記事に掲載される

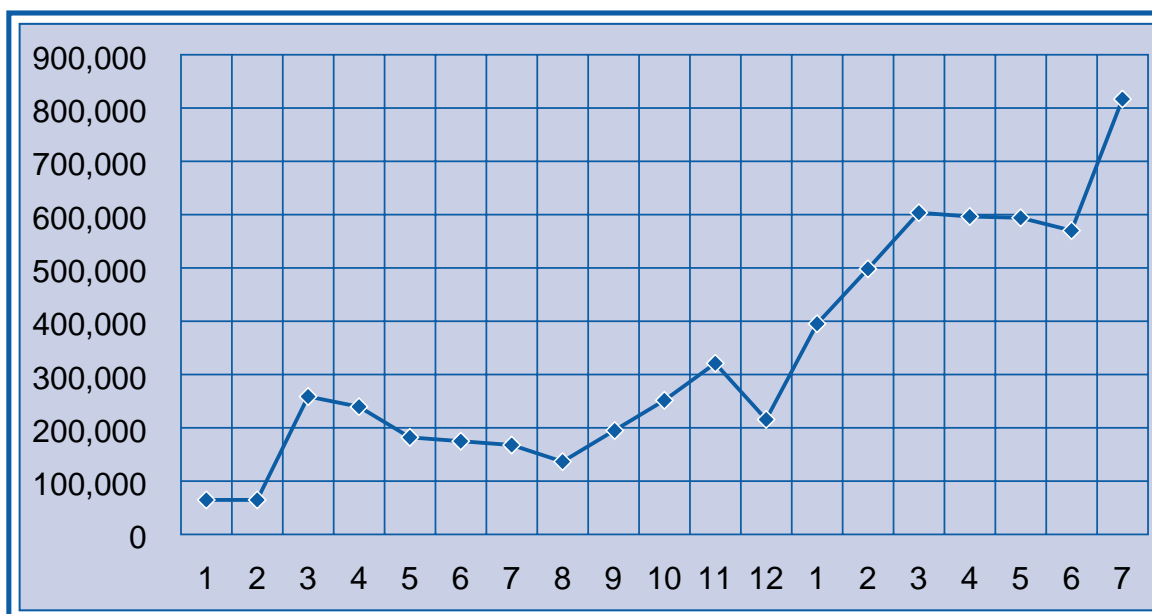
平成10年10月 テレビ朝日で放映される

平成11年1月 京都大学公式ホームページに、ホームページ横断検索システム提供

外国語雑誌目次データベース (SwetScan) 提供

\* 学外からのアクセスが多いのが特徴。

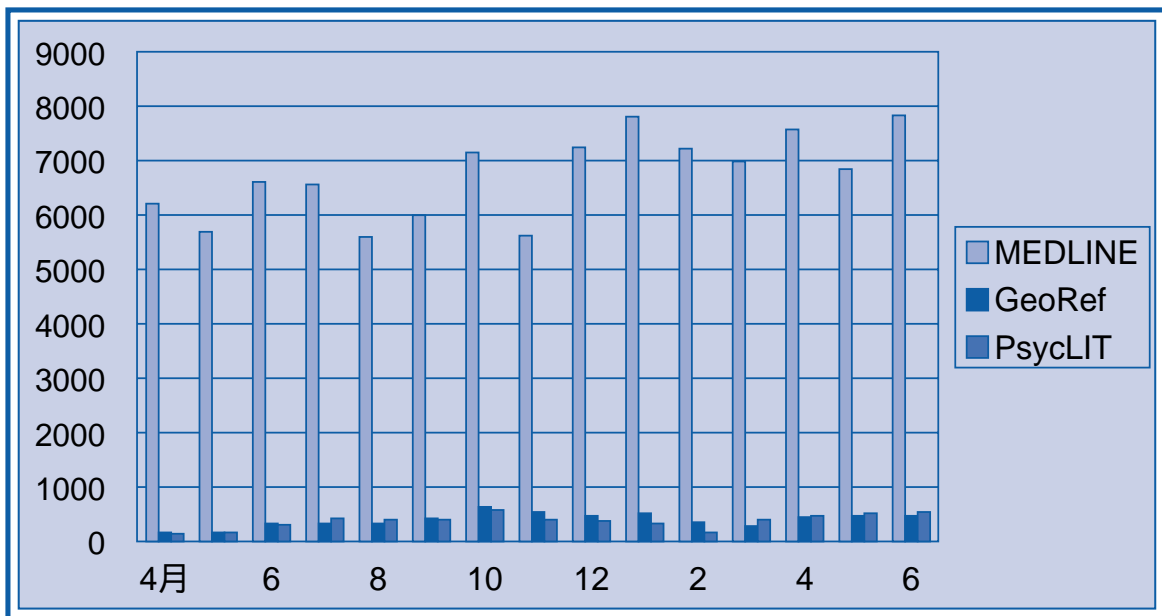
## 5) 電子図書館利用件数 (1998.1 - 1999.7)



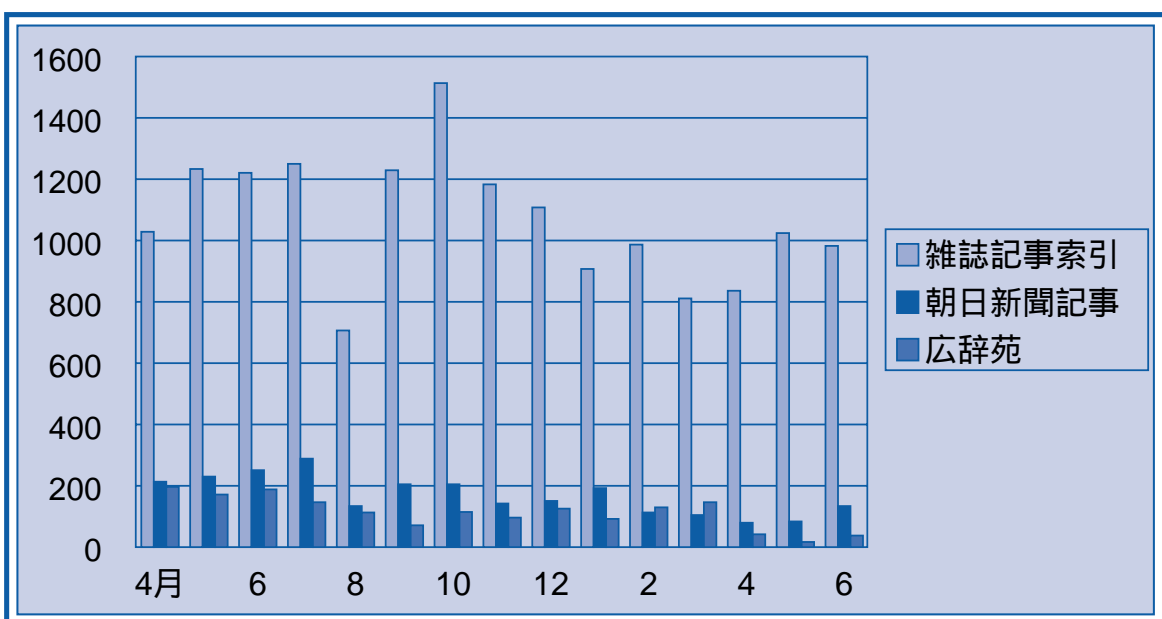
電子図書館利用件数 (平成10年3月1日～平成11年4月20日) 延べ約325万件、月平均約25,000件。海外からの利用 約130,000件 (4%) 米国など英語圏が中心。

その他、台湾 (約9,480) 韓国 (約2,600) 1～2回の利用は76ヶ国。ここ数ヶ月は月60万件から80万件あり、年間利用件数は飛躍的に伸びることが予想される。

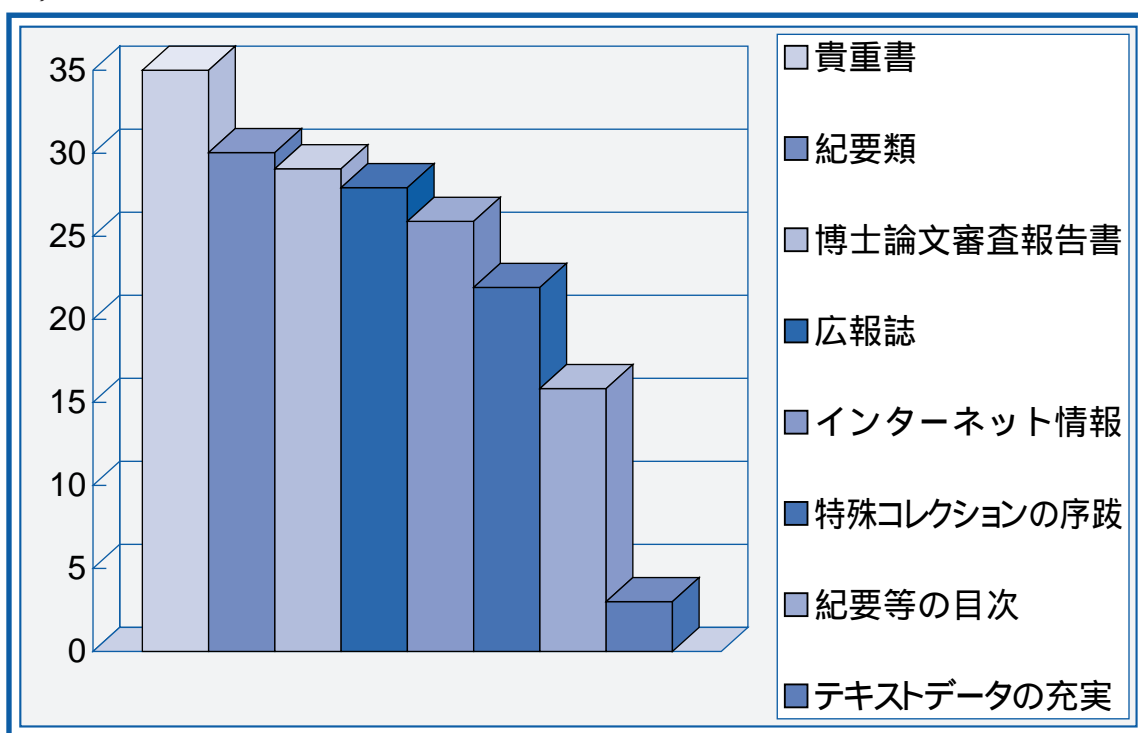
7) ネットワーク型CD-ROM利用状況 (1998.4 - 1999.6)



8) ネットワーク型CD-ROM利用状況 (1998.4 - 1999.6)

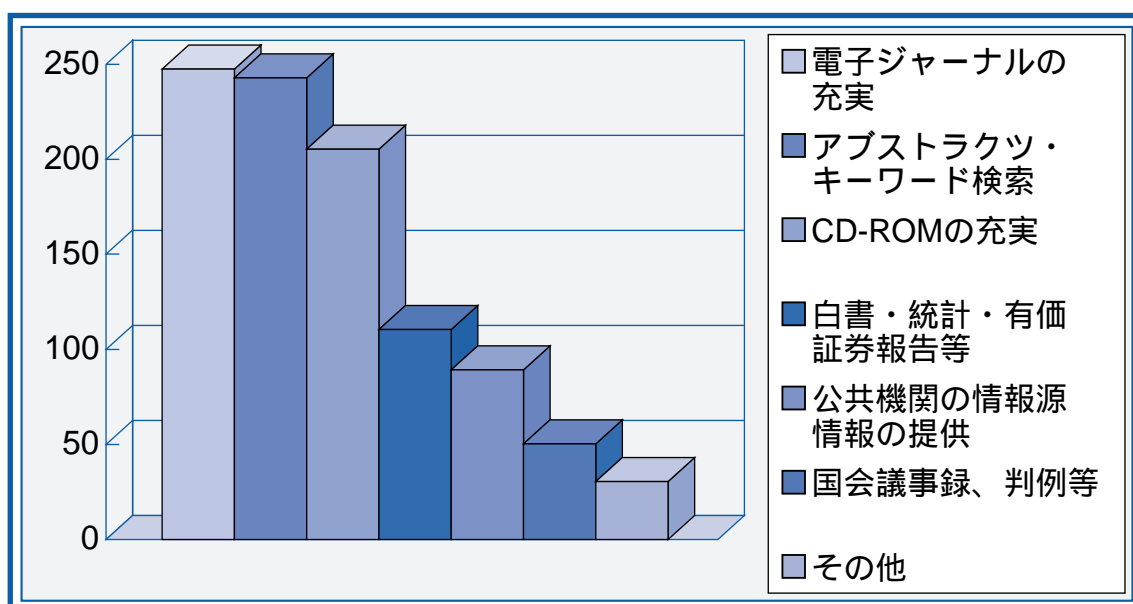


## 9) 部局調査 学内外に発信する情報として何が良いか



学内調査にもかかわらず、貴重書の提供が一番になった。  
 今後、博士論文の審査報告書の追加も検討課題になる。  
 テキストデータの希望が少ないことの分析が必要。

## 10) 部局調査 学内に配信してほしい学術情報等



## 5. 電子図書館システムの今後のあり方について

電子図書館専門委員会、同ワーキンググループで、中期展望を検討中。現在、部局調査を行い内容の分析をしている。その結果をもとに、さらに京都大学の情報を発信するためのコンテンツの種類等の検討を行う。

## 6. 学内の電子図書館システム利用環境

現在、京都大学の中には約1万台の端末があると言われている。総合情報メディアセンターでは、昨年全学に1,100台の端末を配置し、学生等の利用に供している。

附属図書館では、全学に電子図書館用端末を50台、業務用端末を210台、検索用端末60台を配置し、利用環境の整備に努力している。

## 7. データ作成

昨年度のデータ作成の外注部分については政府調達を行っている。そのため画像系データの基準作成のための調査を行った。データ作成に当たっては、かなりの部分を外注しているが、データの確認・チェック作業は文学部の教官から推薦された国史学等の大学院生に依頼している。そのため、作業が早くなり、正確な確認・チェックができています。

## 8. 連携協力体制のあり方

### 1) 京都大学学術出版会との連携・協力

京都大学学術出版会で出版している京都大学教官の著作物を、実験的に当面学内に限ってテキストデータとして電子図書館で提供。著作権処理は出版会が行う。

### 2) 国立大学図書館協議会での検討課題

平成10年の国立大学図書館協議会総会において「図書館電子化システム特別委員会」が設置され（本学は委員長館）、電子ジャーナル等のコンソーシアムや事務効率化、画像データの品質管理、著作権処理等の課題を検討中である。

### 3) 大学図書館に限らず、多くの図書館、美術館等で電子化資料の提供が始まっている。ネ

ットワーク環境が格段に進歩している状況を生かし、従来の省庁、国公私などの設置者の枠を越えた連携・協力ができるチャンスではないだろうか。

## 9. 電子図書館システム見学者数

平成10年4月～平成11年3月

見学機関	機関数	人数
国立大学	47	165
公立大学	12	75
短大・高専等	5	128
他省庁	7	11
国会図書館	6	6
共同利用機関	7	11
民間機関	4	38
その他	6	61
外国	13	150
合計	107	645

国別	機関数	人数
日本	95	498
中国	3	73
欧州	3	21
韓国	2	45
米国	1	2
その他	3	6
合計	107	645

## 10. おわりに

今年百周年を迎えた京都大学附属図書館は、他の国立大学附属図書館と同じように、予算減、定員減等の中で多くの試練に立たされている。独立行政法人化にどのように対応していくのかも、好むと好まざるとに関わらず近い時期に決断を迫られる。

従来型の図書館の発展と共に、電子図書館システムを発展させていくことは、今まで以上の知恵が必要になる。

とはいえ、全国的には非常に恵まれた環境を持ち合わせている図書館でもある。今まで培ってきた多くの先輩達の努力を基礎に、さらなる発展のために、館長を先頭に多くの先生方の力をいただき、職員一同一丸となって努力して行きたい。

（あさづま みよじ：附属図書館情報管理課長）



# 情報リテラシー教育：全学共通科目について

平 元 みさえ

大学図書館をめぐる情報環境は、この数年、電子ジャーナル・CD-ROM等出版形態の多様化、インターネットの普及などにより、図書館の電子化へと大きく変化してきている。これらの状況は、大学の教育・研究活動に反映し、情報収集活用能力が不可欠の要素として求められるようになってきている。

附属図書館は、情報収集活用能力形成の一助とするため、平成10年度から情報リテラシー教育の一環として、全学共通科目「情報探索入門」の提供部局として参画し、科目の開講を実現し支えてきた。開講は、平成9年2月頃に、当時の館長であった長尾真教授（現総長）から授業計画の提案があったことに端を発している。平成10年度前期課程として開講され、講義テキストとして、附属図書館発行の『access.txt文献調査・利用ガイド』が使用された。平成11年度は、講義録をもとに編集・出版された『大学生と「情報の活用」』注1)が、テキストとして追加された。

講義は、「論文・レポートを書くための文献・情報収集、卒業論文作成のための文献調査等に必要な情報活用技術を演習によって習得させながら、情報図書館学、情報探索学の概要を学ばせる」ことを目的とし、長尾総長をはじめ5名の教官が講義を分担し、それぞれ講義に対応した演習に、附属図書館・学部等図書室の図書館職員15名が補助者として参画するという形で実施されている。

平成11年度の講義概要は、別表のとおりである。11年度は、担当教官に新たにベッカー教授が加わり強化・充実が図られた。

図書館の役割は、事務局としての役割（企画立案、実施に関わる事務処理等）と、演習補助担当の役割の二つに大別される。企画立案の段階から図書館職員も参画し、司書としての経験をふまえた議論が、講義・演習に反映されている。また、演習課題を積極的に提案するなど、

教官に協力する形ではあるが、授業に関わる中で、自己研鑽の機会として（特に若手職員にとって）、情報リテラシー教育の方向を探る機会として、得難いものとなっている。これは、講義に関わる諸々の負担を超える大きなプラスの要素でもある。

演習補助には、附属図書館職員だけでなく、学部等図書室職員にも参加協力を得ており、全学的に情報リテラシー教育を考える契機になることも期待される。

平成10年度・11年度共、アンケート回答者のほとんどから「少し難しい内容だったが、将来、絶対役に立つと思う」「文献の調べ方もコンピュータを使って行うというこれから先につながりそうな演習内容はとてもよかった」等、「役に立つ」との高い評価を受けて、引き続き平成12年度も開講することが決定され、教官から提案のあった演習時間の拡大も含めて来年度開講に向けて検討が開始されている。このように「情報探索入門」は、全学共通科目の一科目として定着する方向にあり、年を重ねる中で、一層充実していくものと思われる。今後は、この講義に関わる中で、情報リテラシー教育のあり方を探り、多様な形の教育を検討・提供していくことが課題であると考えている。

（ひらもと みさえ：

附属図書館情報サービス課参考調査掛長）

注1) 監修：長尾真／編集：川崎良孝  
発行：京都大学図書館情報学研究会  
発売：日本図書館協会

## 平成11年度講義概要

- 第1週 大学図書館への招待  
講義：長尾真総長
- 第2・3週 分類の一般概念と分類理論  
講義・演習：黒橋慎夫  
(情報学研究科講師)
- 第4週 学問・研究・文献・情報  
講義：川崎良孝(教育学研究科教授)
- 第5・6週 参考資料の種々とその利用  
講義・演習：カール・ベッカー

(総合人間学部教授)  
第7・8週 目録情報とその利用  
講義・演習：川崎良孝  
(教育学研究科教授)  
第9・10週 データベースの種類とその利用法  
講義・演習：金子周司

(薬学研究科助教授)  
第11・12週 インターネット情報と利用法  
講義・演習：金子周司  
(薬学研究科助教授)  
第13週 情報探索とその周辺  
講義：菊池光造附属図書館長

## 図書収書システムを使って

島 文 子

### 1. 図書収書システムとは

閲覧カウンターや目録登録などの図書館業務に比べると、受入業務は事務的で地味な仕事です。選書、発注、検収、物品登録、支払準備、予算管理、原簿管理、受入統計処理などと並べてみても、どちらかといえば図書館らしくない仕事ばかりです。しかし、この仕事は図書館の構成要素の一つである資料（蔵書）を形成していく重要な役割を担っています。また、図書館・室設置以来手作業で行われてきた部局独自の方法が色濃く残っている分野でもあります。図書収書システムは、こうした図書受入業務の歴史と実務の全般を、図書館業務システムの中にトータルに組み込むことを目指したものです。

### 2. 収書トータルシステムの特徴

新しい図書収書システムの大きな特徴の一つは、受入から目録までを見通したトータル処理システムであるということです。簡単に言えば、収書システムと目録システムとの間でのデータの使い回しができるシステムです。例えば、図書の発注を行う際には、必要なタイトルや出版社などの情報をわざわざ手入力せずに、ローカル目録やNACSIS-CATにある書誌データを利用して、発注用書誌を作成して使います。逆に目録登録の際には、この発注用書誌から検索キーを取り出して、作業が楽にできるようにしています。検収時には、発注レコードのデータから所蔵レコードを自動作成し、それを目録登録時にもそのまま利用します。選書の際にも、目録システムの中にある選書用書誌を利用してリストを作成した後、選書結果のデータを発注レコ

ード作成に利用することができます。このようなデータの使い回しが利くようになって、データ入力や検索にかかる手間やミスが少なくなり、処理が早く正確にできるようになりました。検収段階から所蔵検索ができるため、重複調査が正確にできるというメリットもあります。また、発注・検収・物品登録などの機能が、予算管理や原簿管理、統計管理などの機能と連携しているので、担当者が意識して計算したりデータ入力したりしなくても、いつでも最新の予算執行データや受入統計データを取り出すことができるようにもなりました。

### 3. 登録番号管理のシステム化

図書収書システムのもう一つの特徴は、システムの部分的導入ができるということです。全部局を対象にした受入業務の機械化は、年間総受入数が9万冊を超える京都大学が初めて経験する大きな変化であるため、個々の部局の事情に合わせて、段階的に無理なく図書収書システムの導入を進められるようにという配慮から生まれたものです。部分導入の対象になるのは、図書登録番号の取得システムです。本学では図書登録番号を全学で一元管理しており、従来は各部局図書館・室で作成された命令書を附属図書館に集中し、一括して登録番号の付与を行っていました。新システムでは、これを各部局からオンラインで実行できるようになりました。この登録番号取得システムは、発注・検収を手作業で処理していても利用することができます。従来どおりのマニュアル処理を活かしながら、登録番号管理だけをシステム化できるわけです。登録番号管理がサーバ側で一元的に行わ

れるので、一部局でマニュアル処理（登録番号取得システム）と機械処理（収書トータルシステム）を併用することもできます。また、登録番号取得と同時に受入記録が保存でき、各部局から随時受入統計を出力することが可能になりました。この番号取得システムは、多くの部局図書館・室で導入されて、受入処理の流れの簡素化や、処理期間の短縮に役立っています。

#### 4. システム利用者として

1998年5月の本稼働から約1年半の間図書収書システムとつきあって感じることは、システムと協調できる柔軟な思考能力の大切さです。収書システムはこれまでの受入業務のやり方を基本にして作られてはいますが、従来の方法にあまり拘泥すると、却って不便になる場合もあ

ります。システムのもつ便利さを生かせるように、使い手側が仕事の流れを組み立て直す柔軟性をもつことが求められています。また、このシステムでは図書受入業務と他の業務（特に雑誌受入や目録）とが密接に関連しあっているため、従来の役割分担の壁を取り払って、他業務の担当者と積極的に情報交換を行うことも必要です。日常業務の中で、長年親しんできた方法を見直し、システムとの上手な付き合い方を模索するのはなかなか大変なことです。しかし、さまざまな意味で転換が迫られている今日状況の中で、仕事の合理化や標準化を考えていく一つのきっかけにもなるのではないかと思います。

（しま ぶみこ：収書システムWG

附属図書館情報管理課受入掛）

## 新雑誌収書システムを利用して

富岡 達治

### 1. はじめに

京都大学では、1998年4月より新雑誌収書システムの運用を開始しました。当初はワーキンググループメンバー図書室のみでの運用でしたが、1999年1月より他の図書館・室での運用も開始し、導入図書室は徐々に増えつつあります。当初は、さまざまな不具合もありましたが、現在では、おおむね安定して稼働しています。

### 2. iLiswave収書システム

従来、各図書館（室）での雑誌のチェックインは、ビジブルカードや受付簿を使い、手作業で行って来ました。しかし、今回導入した新システム（iLiswave）は、目録システムと密接に連携したオンラインシステムです。

チェックインを行うと、半日以内にOPAC上に反映されるため、利用者は欠号を含めた到着状況を図書館（室）に来なくても把握できるようになりました。また、1冊1冊のチェックインデータは1週間に1回、一括所蔵データ（NACSIS-CATのローカル雑誌所蔵データ）に反映されます。この一括所蔵データをNACSIS-

CATにアップロードすることにより、学術雑誌総合目録の全国調査時期を気にすることなく、データを最新の状態で更新することが可能となりました。

チェックインの作業は、ビジブルカードと比較してもそれほど手間がかかるというわけではありません。直前のデータから巻号次や年月次を予測してくれますし、価格も自動設定されますので、単純なものであればボタンを数回押すだけで完了してしまいます。さらにチェックイン作業の省力化には自動チェックインという機能があります。これは雑誌の納品時に納品データをフロッピーディスクなどの形で電子的に受け取り、そのデータを使ってチェックインを行うものです。一回のチェックイン量にもよりますが、大量であればあるほど、チェックイン作業量の軽減化を図ることが可能となります。このような機能を有効に活用することは、定員削減等の厳しい状況への1つの対応手段となるはずです。

さらに、システムでチェックイン作業を行う



ことにより、未着・欠号管理から支払管理、製作作業までトータルに管理することが可能となっています。このようにiLiswaveでは1つのデータを活用し、連携させることによってさまざまな機能を実現しています。

### 3. 外国雑誌前払システム

この外国雑誌前払システムは、全学の外国雑誌の購入状況を把握することができます。前金払の外国雑誌については発注から入札・契約、精算・戻入のデータを一括で管理します。

従来、この作業は汎用機を用いて行っていたが、新システムではサーバ・クライアント方式を導入し、各部局からデータの入力や帳票出力をオンラインで行えるようになりました。また、このシステムは契約用データを扱うという事情から、iLiswaveとは独立して稼働しています。

このシステム導入の影響は予想以上に大きく、例えば、精算処理を行う場合、従来ではデ

ータシートの提出からデータ入力、入力確認までは1週間から10日を費やしていましたが、新システムではたったの数十分程度で済むようになりました。

### 4. 今後の運用と課題

以上のように新システムには多くの便利な機能が提供されており、これらの機能を十分に活用することが必要になります。

しかし、運用する図書館員にとっては、従来独自に行っていた手作業中心の管理から、パッケージで提供される機能での機械管理へという大転換が求められることとなりました。

今後は、システムの安定稼働とともに、更なる機能の充実が望まれます。また、従来の運用をそのまま踏襲するだけではなく、iLiswaveの機能を100%引き出すような新しい運用を模索する必要があるのではないのでしょうか。

(とみおか たつじ：収書システムWG)

附属図書館情報管理課受入掛)

## 新しい目録業務システムについて

赤井 規 晃

ここ数年のインターネットの発展には目ざましいものがある。その影響は、図書館の世界でいえば、wwwを介したOPACの提供が標準化していることから、十分窺い知ることができるであろう。さらに、国内各大学の図書館が提供しているそれらOPACの基盤を成す学術情報センターのNACSIS-CATシステム（オンライン・ネットワーク方式による全国規模の共同分担総合目録データベース）も、平成10年1月よりサーバ・クライアント方式のNACSIS-CAT2のサービスを開始し、従来のメイン・フレームからオープン・システムへの移行を着実に進めており、インターネット時代に対応した図書館業務システムは各大学図書館の最も関心ある課題となっている。平成9年度のリプレイスで京大図書館が、NACSIS-CAT2の接続第一号館となり、全面的に利用したトータル図書館システムを全

国に先駆けて導入することとなったのも、上述の動向に沿うものである。昭和60年の本格的電算化の開始以来、二度のリプレイスを経て、NACSIS-CATと密接な連携をもつ全学的な目録業務システムの基盤は整備されてきてはいたが、今回の新システムの導入により、より効率的な目録業務を行える環境が整えられることとなった。改善点は多々あげられるが、ここでは、データベースへの目録登録作業に関わる部分で簡単に紹介しておく。

NACSIS-CATへの書誌・所在データの登録・更新処理が、ローカル目録ファイルに即時的に反映されるようになった。これにより従来ホスト上で夜間バッチ処理によるデータの落とし込みをしていたのが不要となった。

NACSIS-CATおよびローカル目録ファイル双方への所蔵レコードの一括登録・更新処理を



行う自動化機能を新たに追加。数百件から数千件程度のデータ処理がクライアント側からも可能となった。

データの入力に要する時間の短縮と正確かつ迅速なデータ入力のために工夫をこらし、例えば、ロシア語や北欧諸語、タイ・ベトナム語等キリル文字やEXC文字と呼ばれる音標符号付文字を使用する書誌データの編集においては、ソフトキーボード（ソフトウェアにより仮想的に複数の鍵盤を扱えるようにしたもの）を用いて、英独仏語の場合とほぼ同程度の時間で入力を行えるようにした。また、業務間（特に受入業務との間）でのデータを共有することにより、データの転記ミスから誤ったデータが作成される可能性が極力排除されるようになっている。

クライアントOSにWindows95を採用したことでインターネットの利便性を活用できる。GUI環境の特性を生かした効率的テキスト編集、電子化された各種カタログニング・マニユ

アルや目録規則、webベースの海外の国立図書館・大学図書館等のOPAC等をブラウザで同時参照しながら目録業務が行えるようになり、カタログニングの効率が大幅にアップした。同時に、全学60余の図書館・室の円滑な連絡・調整等のために、目録業務担当者のメーリングリストを設置し、目録業務用webサイトを開設するなど担当者間での情報交換を促進するための工夫もこらしている。

最後に、今後予定される機能として多言語対応がある。2000年1月より、NACSIS-CAT2はデータベースでISO/IEC10646 UCSを採用しマルチバイト文字を統一的に扱える環境を整備する予定になっているが、これに合わせて、中国・韓国・朝鮮語資料等の入力を行える環境の準備も現在進められている。

以上が、新しい目録業務システムの特色となっている。

（あかい のりあき：目録システムWG

附属図書館情報管理課目録掛）

## iLiswave閲覧システムについて

蒲 彰 子

閲覧システムというと、図書館関係者以外の方は、資料を見る際の何か画期的な方法かと期待されるかもしれませんが、ここでは、閲覧に供する資料をコンピュータを利用して貸出・返却する仕組みのことを指します。

本を貸してもらおうとカウンターにやってきました、図書館員に学生証と本を差し出すと、一瞬気まずい沈黙があり、「延滞している本がありますね。ペナルティーがついていて新たに本は借りられません」と言われてギクッとしたことはありませんか？そんなことがたちまちわかってしまうのも、閲覧システムが導入されているからなのです。

このシステムでは学生証についている図書館利用証のID番号を読み取ると、借りている本の一覧（期限日等も含む）が表示され、本につ

いているバーコードラベルをスキャンすれば、通常ほんの数秒で貸出・返却手続きが済んでしまいます。コンピュータ・ネットワークの障害時にも、オフラインで処理できるようになっており、図書館員をパニックから救っています。

なかなか本を返却してくれない利用者のリストもたちどころに作成され、さらに督促用のハガキも印刷されます。一方、その本をずっと前から予約して待っている利用者には、貸出可能になったことを知らせる予約棚リストが役にたちます。

利用者の中には、個人情報も一覧できてしまうシステムは問題があるのではないかと懸念される方もあるかもしれません。しかし、この閲覧業務用端末はカウンターの中にあり図書館員以外が操作することはありません。教室図書

室によっては利用者自身が利用証や図書のバーコードをスキャンして借りるようになっているところもありますが、その場合は個人情報の画面は表示されないように設定してありますのでご安心ください。

このように、iLiswave（富士通の図書館総合システム）のなかでもOPACと並んで利用者に身近な位置にある閲覧システムですが、蔵書点検という機能についてご紹介しましょう。去年の8月、附属図書館では開架図書の一斉点検を実施しました。これは、携帯用の端末4台で開架書架に並んでいる図書を全てスキャンし、登録してある開架図書の所蔵データと照合するというものです。結果は開架図書の約1.5パーセントが不明。不明図書の割合があきらかに高い分野もあり、今後どのように対処すればよいのか頭の痛い問題です。

ところで私は今年の1月に附属図書館から北部構内の基礎物理学研究所図書室に異動になり、カウンターで接する利用者の数やキャラクターという点では大きく変わりました。たとえば附属図書館は学部学生の利用が圧倒的に多く1日平均405冊（平成10年度）もの貸出があります。基礎研の貸出冊数は1日平均6冊（平成

10年度）雑誌の利用が中心の研究所図書室です。このように各図書室の性格を数字で表す、貸出冊数やその他の統計が、各端末ですぐにわかるというのもこのシステムの特徴のひとつです。

図書館が電子図書館としての機能を一層深め、一方きびしい人員削減が行われるなかで、おそらく百年前に京大図書館が誕生した当初からあったと思われる対面閲覧業務は、まさに消えゆく運命にあるのかもしれませんが。iLiswaveの閲覧システムでも自動貸出装置との連携がうたわれており、実際導入の動きが具体化している部局もあります。しかし、有人の閲覧カウンターが果たしている機能は、単なる機械に置き換えられる貸出・返却処理だけなのでしょう。電子化が高らかに叫ばれるなかで、利用者の小さなつぶやき声や生の表情を、微力ながらサービスに反映できる窓の存在はなおざりにされてはならないと思います。利用者の動向を感じしそれを業務に生かしていく、触角を備えた図書館システムこそこれから求められるのではないのでしょうか。

（かば あきこ：閲覧システムWG

基礎物理学研究所図書室）

## 新ILLシステムについて

児 玉 優 子

### 1. はじめに

探していた本や雑誌が図書館の本棚にないとき、または、OPACで検索しても見つからないとき、あなたはそこで諦めていませんか。学内にない資料でも、図書館を通じて他大学からコピーや貸出で入手することができます。これが、図書館間の「相互利用サービス」すなわち「ILL (Inter Library Loan)」です。

ILLには 複写申込、現物貸借申込、複写受付、現物貸借受付の4つの業務があり、具体的には所蔵館を調べたり、所蔵館に申し込んだり、他大学からの申し込みに対してコピー

を取って送ったり、料金をやり取りするなどの作業があります。現在は、学術情報センター（NACSIS）のNACSIS-ILLシステムを中心にオンラインで業務を行っています。

### 2. リプレースによる変化

昨年（1998年）1月から京都大学の図書館システムのリプレースが順次行われ、ILLワーキンググループで検討してきた新ILLシステムも、同年4月14日に本稼動しました。

このリプレースによって変化したことは、まず、ILLレコードを蓄積できるようになったことです。このことによって、どの雑誌の複写を

申し込む回数が多かったか集計できるようになり、購入雑誌見直しの参考データとして利用できるようになりました。また、手作業で書類作成したり、わざわざデータ入力していた会計処理も、蓄積したILLレコードを利用して短時間でできるようになりました。

さらに、NACSIS-ILLを介して図書館間でデータ（雑誌名やページ数など）のやり取りをするための作業画面を自由に設計できるようになりました。繰り返し使用するコマンドをボタンで用意し、コード参照ファイルによってコード確認の手間を省き、入力作業を簡素化することができました。

ほかに、他大学からの申し込みを受け付ける作業帳票にOPACのデータを取り込んだり、NACSIS-CATを利用してNACSIS-ILLには参加していない図書館への申込書を作成するなど、新しい試みもあります。

これらは、利用者の皆さんの目には直接見えない変化ですが、担当者の能率が上がり、図書館・室のサービス全体の向上につながることが期待されます。

### 3. ふりかえって

今回のリブレースで、京都大学は全国に先駆けて新しい通信プロトコルで学術情報センターに接続しました。まったく新しく作成したシステムだったので、果たしてうまく動いてくれるかどうか、不安な中で4月14日を迎えました。

通常、システムの切替時期はしばらくサービスを停止することが多いのですが、今回の切替は一夜のうちに終われ、一日もサービスを停止することなく完了できました。新システムも大

きなトラブルなしに動いてくれて、学内の利用者の皆さん、他大学から申込みされる皆さんにご迷惑をおかけすることなしに新しいスタートを切れたことを、ILLワーキンググループのメンバー一同喜び合いました。開発者、京大のスケジュールに合わせて準備を進めていただいた学術情報センター、附属図書館および各部局図書館・室のILL担当者の皆さんのご協力に感謝します。

個人的には、ユーザとしてシステム開発に参加させていただいたのは初めての経験でした。日常業務も行いながら要望を出したり動作確認をしていくのは大変でしたが、自分の提案したアイデアが実現していくのは楽しいことでもありました。以前のシステムが不自由だった分、こうしたら便利なのではないか、という要望をたくさん出せました。まだNACSIS-ILLを利用していない図書館・室の方々にも、ぜひこの新システムの便利さを味わっていただきたいと思います。

### 4. 今後

新ILLシステムによって学内ILLのデータ処理も可能になりましたが、学内ILLについては制度自体を見直す時期に来ているかもしれません。

なお、ILLシステムの開発は今も続いています。現在は、図書館まで足を運んで申込書を書いていただかなくても、インターネット上で申し込めるシステムを開発中です。近いうちに「ドキュメントオーダーシステム」としてご紹介できることと思います。

（こだま ゆうこ：相互利用システムWG

医学図書館閲覧掛）

## 京都大学電子図書館の現在

後 藤 慶 太

### 1. 概要

本学電子図書館は、平成10（1998）年1月6日に稼働し、同年3月2日の披露式をもって本

格運用を開始した。「机の上に京都大学」をキャッチフレーズに、ここにアクセスすれば居ながらにして本学の森羅万象がわかるシステムを

目指している。それはまだ発展途上であるが、本格運用以降、本年4月までの間に、延べ3,247,000人、月平均25,000人がアクセスし、海外からの利用もその4%を占めている（英語圏を中心に76カ国から）。特に、国宝「今昔物語集」、維新資料をはじめとする重要文化財・貴重書の画像や後述する学内刊行物へのアクセスが顕著である。また、視察に訪れた機関も100を越えている。

## 2. 電子図書館システム

富士通株式会社の電子図書館システムiLismindsを導入している。導入後も改良が施されており、システムとしてはまずまず安定していると言えよう。テキスト系コンテンツ（以下、単にテキストとする）がまだ少ないため、その機能や検索エンジンに対するきちんとした評価を出せていない状況である。

## 3. 電子図書館の4つの柱

### 情報発信

貴重資料画像を中心に、京都大学百年史、京都大学博士学位論文論題一覧、樋口一葉作品集等のテキストも増えてきている。現在公開中の貴重資料画像はおよそ47,000枚あり、今年度公開予定のものを合わせると80,000枚近くに達し、さらに今年度作成計画中のものも加えると140,000枚を越える大きなデータベースとなる。今後、資料の解説や現代語訳、研究成果等の付加価値を付けていくべきか、あるいはあるがままのデータだけ提供すればいいのか、といったことを検討する必要がある。また、詳細画像については、現在は簡単なコピーライトを表示しているだけで、その二次利用について一抹の不安を覚える。電子透かし等の技術が安価で提供されることが待たれる。

### 情報配信

ネットワーク対応のCD-ROMやElsevier社の電子ジャーナル、外国語雑誌目次データベ

ース（SwetScan）等を学内向けの学術情報として提供している。電子ジャーナルや各種データベースに対する要望は高く、今後それらをどのように増やしていくか、予算や会計制度上の解決しなければならない課題がいくつかある。

### 電子出版サポート

学部の紀要など本学が創造する学術情報の電子化を支援するというものである。総務部広報調査課、同じく国際交流課との協同により、学内刊行物を2点公開している。

### 高度な検索・ナビゲーション

テキストの全文を対象とした検索や、キーワードを同義語・訳語に展開させて検索することが可能で、電子図書館専用ブラウザを使えば、データを本の形にして読んだり（縦書き表示も可）、付箋を貼ったり、朗読をさせたりすることができる。また、テキストには自動翻訳機能（和・英訳）が備わっているが、その辞書や能力の強化が望まれる。

## 4. 電子図書館とは何か

本学には、電子図書館稼働以前から電子図書館研究会による電子図書館実験システムAriadneの開発経緯があり、筆者も95年頃から館内の電子図書館ワーキンググループに属してきたが、その当時から今に至るまで電子図書館というものに対する明確な像を結べないままで来ている。はたして電子図書館が従来の図書館を駆逐するものなのか、従来の図書館と融合し、強化していくものなのか。電子図書館専門委員会でも中期展望を検討するワーキンググループが中間まとめを提出したところで、これから本格的な議論が始まるであろう。

京都大学電子図書館は、その名のとおり附属図書館の単独事業ではない。全学的な協力のもと、より良いシステム、より豊富なコンテンツを持つ電子図書館になるよう期待したい。

（ごとう けいた：電子図書館システムWG

附属図書館情報サービス課参考調査掛）



## 展 望

## 附属図書館に望むこと

野 木 達 夫

1998年春、電子図書館が立ち上がって間もない専門部会で意見交換があった際に、「ヴァーチャライブラリ(VL)に期待したい」と発言したところ、「図書室へ足を運べば、新しい出会いもあり、思索にもつながる、そういう従来型の図書室を大切にしたい」というご意見をいただいた。ここで少し補足をさせて貰う。VLは手元の端末で目的の図書室に出かけて本を探す疑似体験ができ、必要資料を借りたりコピーしたりの手続きにも連動するといったイメージで述べた。学内各所の図書室がいつでも開け、開架図書を辿り必要なものを取り出してページを繰ることもできる。画面には図書室にいて見る書架などの映像がそのまま登場する。これなら、新たな出会いも思索も期待できそう。

VLはなじみの図書室をよく再現していることに加え、実体験で十分にイメージが焼き付いていることが望ましい。現場は長期間配架状態がほぼ同じままに保たれ、幾度も足を運んで何がどこあたりにあるかの見当もつく必要がある。さもないと画面で辿ることは不便である。尤も検索システムと連動しているので、書誌事項がわかっている必要書類なり、本そのものにアクセスできるが、いまは図書室であれこれ考えながら探っていく疑似体験について述べている。身近な研究室図書室ではすべての棚をみても大した時間はかからないので、何かを思い立ったときにひたすら本の背をみて回ることもある。資料の内容も含め全体像がある程度できあがっていて、一番の相談相手である。部局の図書室についても利用するほどに「自分にとっての図書室」ができ上がる。そのうえでのVLであれば便利なものになる。

各人が図書室イメージをもつにも、なじみのある書物とともに新しい出会いを期待させる魅力に富んだ図書室であることが要である。果たして附属図書館の開架部分(約10万冊)はそれに応えてくれるであろうか。主に学生諸君が啓発され、親しめるような内容になっているであ

ろうか。附属図書館も随分整備されてきたが、その顔ともいえるべき開架書棚の内容と空間にはもっと工夫があってもよい。最近では学長裁量経費などを得て、学生からの希望を聞いたり、選書委員が定期的にカタログから選んだり、年に一度書店に出向いて選書するなどして学生用図書の充実化がはかられている。しかし、現状を踏まえた選書方針の検討がないままに補充する感が拭えない。ここは、司書の方々に本領発揮いただくことを期待するとともに、幸い多様な専門分野にわたる選書委員を抱える大学であり、両者が連携協力すれば、もっとすばらしいものに改変できるのではなかろうか。新旧の分類によって書架が分離されていることも利用者にすれば好ましくない。書架の傍で本を涉猟し、また読みふけることもできるようなスペース設計についても工夫がほしい。

ついでながらVLの夢を膨らませよう。パブリック性の強い図書室では、多様な要望に対処できるように、標準的な分類に則り多量の書物が一様に平板的に並べられることは当然である。対照的に全くプライベートな書棚では自分に気に入った書物を思いのままに並べる。数は少なくとも互いに関係しながら所有者に語りかけてくれる。その役も演じるプライベートなVLをパブリックなVLから借りてきて作り上げることも展望したい。それは所有者の歩みとともに拡大する高次元空間を構成する。単なる総和情報レベルを越えた高い知識を生む可能性が孕まれている。空間表現設計も各人思いのままである。多年積み上げられた経験者のVL自体を借りることも可能。そんなVLの実現のための環境整備とソフトウェア開発は、技術的にはそれほど困難ではなかろう。図書情報のデジタル化が前提になることは云うまでもない。それでも依然大事なことは、VLの基盤となるパブリック図書室の充実化であることに変わりはない。

(のぎ たつお：大学院情報学研究科教授)

## 謙虚な気持ちで

福田 知可志

このたび附属図書館は百周年を迎えます。私は一利用者として大学入学以来十四年間、事務補佐員としては五年間、資料閲覧・生活収入の両面で恩恵を蒙って参りました。この間、私自身紆余曲折あって、目標と自信を失いかけて、苦しい時期がありました。そんな時、私にとって附属図書館は好きな本と絶えず接することが許される場であり、所蔵される貴重な資料・様々なジャンルの本に触れ、好奇心を刺激される場であり、また、こうした図書閲覧を通して、自分自身を省み、冷静に見つめ直し、元気を取り戻す場でもありました。長い歴史を持つ附属図書館はあまたの利用者を受け入れ、その生きざまを見つめてきたことでしょう。これらの方々に比して、私は我ながら呆れるほど不格好な人生を送る未熟者に過ぎません。今はただ感謝の念で一杯です。

現在私は事務補佐員ではありますが、大阪市立大学に籍を置いており、附属図書館の資料を利用する場合は、卒業生扱いとなります。借用はできないものの、検索・閲覧させて頂いております。OPACシステムの導入に伴う検索用端末の大幅な設置など、附属図書館は毎年変貌を遂げています。カード検索を行う必要のある古い資料についても、職員の皆様のお蔭でコンピューターへのデータ入力が進められており、完成が待たれます。私が利用者として有り難いなど実感したサービスとしては、他に次の二点があります。一つは日曜日開館サービスの開始です。土・日の週末を利用した資料調査が可能になったことにより、従来の土曜日のみ開館されていた時代に比べて、時間的余裕を持って資料調査を行うことができます。日曜日開館を実施している大学図書館は、全国でもまだ数少ないと聞いております。二つ目は今年の四月から、生協のコピーカードを使えるコピー機が館内に設置されたことです（庫内・開架に一台づつ）。従来、学外者・卒業生は、カウンターの手続きの後に、資料を持ち出し、業務時間内に、館外で複写を終え、返却しなければなりませんでした。複写の量によっては、時間的制約の中、いっ

たん複写のため館外に資料を持ち出すことは負担に感じられます。現在は、卒業生・学外者は庫内に入れないため開架の一台を使うのですが、利用者が多く待たされることもしばしばです。

このように附属図書館は利用者にとってより使いやすい環境を整えつつあります。その一方で、あえて気になる点を挙げますと、現在の附属図書館は、残念ながら必ずしも静かで集中できる環境であるとは言い難いということです。

携帯電話の使用、私語を慎まず、友人とのおしゃべりに夢中な利用者が、近年急激に増えていきます。また館内での飲食は禁止されているにもかかわらず、もはや公然と行なわれています。館内のごみ箱からは空き缶・ペットボトルが溢れ、机の中に飲み残しが無頓着に放置される有り様です。マナーの悪化は深刻です。図書館に対する感謝の念、他の利用者に対する思いやりが感じられませんが、入館機のゲート前に注意を呼びかける掲示が設けてありますが、更に利用者の意識を高めるよう、注意・指導を徹底する必要があります。私達も事務補佐員として気をつけて注意していますが、効果はあがっていません。因みに大阪市立大学学術総合センターの状況と比べますと、ここは一階に喫茶が設けてあり、のどの渇きを癒すにもよく、友人との会話を楽しむこともできます。その代わり入館機のゲートをくぐれば私語・飲食の持ち込みは厳禁です。携帯電話の呼び出し音をたまに耳にすることもあります。私の見るかぎりでは、利用者はよく守っているようです。附属図書館とは広さ、利用者の数に違いがあるため、単純な比較はできませんが、静かな環境という点では、大阪市立大学が優れているようです。

今後、利用時間の延長など利用者へのサービスの充実は図られていくことと思いますが、サービスを受ける利用者自身も今一度謙虚な気持ちをしっかりと持ち、マナーを守って図書館を利用するようこの場を借りて呼びかけたいと思います。

（ふくだ ちかし：大阪市立大学大学院文学研究科修士課程）

## 利用者の目から見た附属図書館

熊谷和則

「利用者の目から見た附属図書館」という題で、「情報学研究科の院生としての立場から」文章を書くように依頼を受け、引き受けてはみたものの、書く内容を練り始めてみると、テーマの難しさに頭をかかえてしまいました。

現在の情報通信の世界は変化が激しく、今書いた文章が、一週間後にはナンセンスなものになっている可能性はかなり高いと思います。さらに、「情報学研究科の院生としての立場」と言っても、情報処理、ネットワーク関連、図書館学にはうとい私には、学術的な裏付けのもとに図書館について書くことは不可能です。

そこで「ある一人の理系の大学院生としての立場」から、今までどのように附属図書館を利用してきたか、附属図書館に何を望むのか、を書きたいと思います。

学部生の頃の利用目的は、「これこれこういう本を読む為、あるいは借りる為」と、明確に定まっていました。理系の学問で、いずれは最先端のことを勉強、研究しようと考えていても、まずは基礎的なこと、昔から知られていることをしっかりと修得する必要があります。

自然科学系のテキストで内容が濃いものはあまり売れないためでしょうか、少し古いものだと、品切れ、絶版になっていて、書店では手に入らないことが度々です。その点、附属図書館には日本語のものならば、かなり読者が限られそうな(あまり利用者はいなさそうな)本でも、重要なテキストはそろっていて、大変助かっています。図書館の規模がそんなに大きくない大学に通っている友人の話の聞くと、我々は恵まれているのだなあ、とつくづく思います。

さて、大学院に入学し、日々の活動が、基礎的な「勉強」から、より専門的な「研究」へと推移するのに従い、調べる文献も、基本的な教科書、参考書から、学術雑誌や専門書(それも英文がほとんど)へと変わって行きました。

このような文献を探す時には、直接、図書館

の書架へ行って探すのはあまりにも非効率です。自然と、コンピューターを使うことになります。

インターネット上の検索サービスなどで書名や、雑誌ならば欲しい論文が掲載されている号数などを調べ、次にOPACで、京都大学内の所蔵館を調べるというのが一般的な手段でしょう。これらの手続きは、全て研究室のコンピューターから行なえます。また、私の専門分野に関する学術雑誌の類は、部局図書室が所蔵していることが多く、自分の研究に関わることで附属図書館へ足を運ぶことは院生になった今ではほとんどなくなってしまいました。(もっとも、院生でも文系の方々や、工学研究科の化学系の方々には研究のために附属図書館をよく利用されているようです。)

研究の手段として、附属図書館を利用することは減ったものの、未だに附属図書館にはよく行きます。それは、新聞、雑誌を利用する為と、研究以外のことで調べものをする為です。

現在、新聞や雑誌の論調を見ると、たいいていのことはインターネットで調べることができるようなことが多く書かれているように、僕には思えます。

しかし、いざ使ってみると、適切な検索を行う為には、自分にある程度の教養が必要であることを思い知らされます。

そして、これはあくまでも、私の個人的な意見ですが、「教養」を身に付けるには、現在のところでは、まだまだ旧来のメディアを利用した方が、得るものが多いと思います。

そこで、まだまだ図書館を利用することが重要であり続けているわけです。

今後図書館というものがいかに変わろうとも、「教養」を身に付ける道具の一つとしての機能は果たしていった欲しい、そう願っています。

(くまがい かずのり：大学院情報学研究科修士課程)



## 図書館、システム、情報環境

山 田 周 治

図書館は、情報技術の進展に対応してその姿を変えつつある。利用者にとって図書館の変化とは、貸出に機械が使われるようになったこと、蔵書検索が端末で行えるようになったことくらいかもしれない。しかし、利用者の目に触れることのない裏方仕事は、ここ15年で跡形も無くと言ってよいほど変わった。そして今は、新しい情報環境に対応するべく、サービスの内容自体を変えようとしている。

大学図書館にコンピュータが導入され始めたのは20年ほど前になる。当時多くの大学図書館では、蔵書の肥大化と新規資料の増加のため、従来の技術である目録カードによる資料管理に限界が見えていた。これを打開するため、日本語の入力技術さえ未熟な時代であったにもかかわらず、図書館界は積極的にシステム化に取り組んだ。

図書館のシステム化は、単に個々の図書館にコンピュータが導入されただけではない。中央（具体的には学術情報センター）に巨大な目録システムを置き、全国の大学が共同で資料の目録データを入力し管理する(Shared Cataloging)という方式がとられた。これは、図書館の業務とサービスの両面に大きな変革をもたらした。

業務面の影響は目録業務に著しい。それは単に担当がペンをキーボードに持ち替えただけではない。それまで図書館ごとに行なわれていた目録業務が、一つの（電子的な）屋根の下で仕事をするようになった。言い換えると、家内工業から工場制へと移行したのである。それは図書館にとって産業革命と言ってよいほどの変革であった。

こうして入力されたデータを使って、2つの重要なサービスが展開される。1つは蔵書検索のシステム化である。一般にOPACと呼ばれるが、これは図書館を大幅に使いやすくなった。いまではどの図書館でも見慣れたものになっている。

2つめは、ILL（図書館間の相互利用制度）のシステム化である。それまで郵送で行われてきたILLが、学術情報センターにより全国規模でシステム化された。これにより文献入手の時間が短縮されたが、このサービスの質的な向上が需要を大幅に増加させた。その増加量は著しく、各大学とも悲鳴をあげるほどと言っても過言ではない。

このようにして図書館は、システム化により改革を成し遂げた。これはいわば内側からの変革であったが、いま図書館は外からの変化の波に洗われている。それは言うまでもなく、インターネットに代表される情報環境の変化である。図書館もホームページの開設や、OPACをインターネット対応にするなど、それなりの対応を行った。しかし、インターネット技術の影響は、そんな生やさしいものではなかった。だれもが予測しえなかった影響を図書館にもたらしているのである。

第一に、個人がパソコンを持つようになり、それが情報活動の主要な場になったことである。今や情報の入手、分析や加工、レポートの作成など、ほぼすべての段階にわたってパソコンが使われている。パソコンをこのように使いこなす素養は情報リテラシーとも呼ばれ、社会人としての基本的な資質とまで見なされるようになってきている。図書館としても、そのような状況を前提としてサービスの展開を図る必要が出てきたのである。特に情報の入手については、システムを利用できる環境を整え、使い方の指導をするなど、その過程に深く関わるのが求められている。

第二に、情報の受け手の環境がブラウザに統一されたことで、情報流通の革命が起こりつつあるということである。ここで問題にしているのは、CD-ROMなど物理的に形のある資料のことではない。電子ジャーナル、あるいはオンラインジャーナルと呼ばれるもので、出版社が



ら利用者に、電子形態のままインターネットを通じて直接送られる形態のサービスをさす。なかには、文献検索と電子ジャーナルを組み合わせたサービスも始まろうとしているが、これは検索結果の画面から直接オリジナルの文献が読めるので、利用者にとっては、まさに理想的な環境である。今後確実に、情報流通の重要な形態の一つになっていくであろう。しかしこれは、図書館を経由しない情報の流通が本格的に始まろうとしているということでもある。図書館にとってその存在は脅威である。

第三に、情報発信が容易になったことで、大学が生産した情報を自ら発信するよう求められるようになったことである。いわゆる電子図書館と呼ばれる機能の一つである。これは図書館という名で呼ばれるが、実質は出版に近い。図書館は今までにない機能を求められているのである。本来これは、事業ととらえるべきものかもしれない。

それにしても、インターネットである。インターネットは時に様々な面を見せるが、その一つは巨大なデータベースとしての姿である。自由に発信される膨大な情報が、ある程度整理され検索できるようになったとき、それは巨大なデータベースとなって我々の目の前に現れた。量は力を生み、人を引きつける。私自身、貴重な情報を得たことも一度や二度ではない。しかしそれは全く統制のない世界である。内容も質も様々で、泡のように生まれては消えていく。図書館にとっては、まことに扱いづらい対象である。図書館がこれにどう対処するのか、様々な議論と試みが必要とされている。

さてそれでは、これからの図書館サービスはどのようなのであろうか。それは一言でいうなら、情報環境の提供である。情報のメディアと流通が多様化するなか、図書館はそれらを利用できるよう、それぞれに手段を用意しなければならない。一方で、いまだ多くの情報は紙の形で流通している。これまでに蓄積してきた膨大な冊子資料と合わせて、より有効な利用を図らねばならない。さらには学外機関の情報も、資源の一つとして積極的に組み込むことも必要であろう。そしてこれら異質な情報資源を、快

適に統合的に利用できるよう特別に設計されたインターフェースを用意する。完成すれば、それはまさに情報環境と呼ぶにふさわしいものになるであろう。ただ、これを実現するためには、資料やシステムの管理の徹底だけでなく、財源の獲得や配分など経営的な要素も大きく関係する。人員も予算も右下がりの状況のなか、その実現への道は平坦ではない。

今の図書館界のホットな話題は、多言語処理である。システム上の制約から、中国語資料など日本語と欧米系以外の言語の目録データは、言語どおりの形では扱えなかった。最近ようやくシステム環境が整いつつあり、図書館が長い間待望していた多言語処理が始まろうとしている。越えなければならない課題は多いが、図書館はこの技術に熱い期待を寄せている。情報環境を整えるため、図書館は今も自らを変えようと努力している。

最近、ナレッジマネジメントという概念が出てきている。定義すら固まっていない状態であるが、個人のパーソナリティを、組織のためにどのように活用していくか、というのがその目的と聞く。言い換えると、これまで主に業務の合理化・定型化という、個性とは正反対のところで使われてきたシステムが、いま個人のパーソナリティを活用するために使われようとしているのである。図書館職員は、情報と人とを結び役割を担う専門家＝司書でありたいと願ってきた。本来それは個人の資質が大きくものをいう分野である。そう遠くない時期に、我々は自身を情報資源としてシステムに組み込んでいくことになるのだろうか。それは図書館員が追い求めてきたシステムなのかもしれない。

図書館はどこに行こうとしているのか。図書館という建物としての空間、蓄積してきた資料、それを管理し活用するシステム、多様に広がりゆくネットワーク、その上に展開される情報。これに、われわれ司書を含めよう。これら情報資源を統合し環境として提供することが、次に図書館の目指すものである。

(やまだ しゅうじ：附属図書館情報管理課  
システム管理掛長)

## 資料のより効率的・迅速な入手のために

鈴木 敬二

現在は従来の紙媒体の資料に替わる電子ジャーナルやインターネット上の情報など新しいメディアの実用化が始まった段階である。21世紀においても紙媒体の資料が無くなるとは考えられないが、これら新しいメディアの相対的な比率は増大し、また続々と新種の情報元が出現するものと考えられる。

こうした状況にあって、図書館は利用者が求める資料を迅速かつ効率的に入手できるよう努力していかなければならない。もちろん、前提としてできる限りの資料を京都大学の資料として確保することがなにもおいてもまず重要である。限りある予算で効率的に資料を収集するためには、重複購入を避けることがまず考えられるが、そのためには、全ての資料を全学の共用資料として、京都大学の全構成員が簡便に利用できるよう条件整備が必要であろう。

さて、京都大学の資料にせよ、国内外の他大学・機関の資料にせよ、必要とする資料を所蔵している図書館を知ることが、資料入手のまず第一歩である。幸い日本においては学術情報センターの目録所在情報データベースが存在しているので、全国の大学図書館の所蔵を研究室や自宅からも簡単に知ることが可能である。ただし、現在のところ、入力されているのは全所蔵の1割程度にすぎない。遡及入力 of 早期完了が強く望まれる。次に入手については、直接図書館に出向くことなく予約や現物貸借あるいは文献複写の依頼がOPACから直接できるようにしなければならない。さらに、図書資料現物や複写物を研究室や自宅へ直接届けるようなシステムが必要であろう。

ただし、現在もこの相互協力の業務の利用は多く大変な作業となっている。今後は、全国的には文献複写センター機能付きの保存図書館の創設や複写業務の外部委託化などが検討される必要がある。さらに、現在このサービスは有料であるが、料金徴収が大きな仕事となってい

る。今後、無料化も含めて、より簡便な方法を検討する必要がある。

電子ジャーナルやオンラインデータベースでは、論文単位で検索が可能であり、抄録を参照し、必要とあればオンラインで全文を見たり印刷したりすることが可能である。今後はますます紙媒体から移行していくだろう。

現在のところ、これらメディアは高価な価格が問題となっている。特に、移行段階であり、冊子体と電子メディアの双方を購入しなければならないケースも多く問題が大きくなっている。コンソーシアム形成による価格交渉など、今後、利用が増加していくにつれ適正な価格になるよう図書館界全体で様々な努力が必要であろう。

WorldWideWeb上の情報も学術的に無視できない状況になってきている。玉石混淆のこれらの情報から学術的に有用な情報を選択・整理して利用者に提供することが図書館の重要なサービスになるものと考えられる。また、今後、さらにインターネットを利用した新しい形態の学術情報提供の仕組が出現すると考えられる。図書館員は常にこれらの情勢について監視する必要があるだろう。

現在の京大電子図書館システムは情報発信機能に重点を置き、貴重書の画像データベースは他を圧倒して充実している。今後は、以上に述べたような情報の配信機能にもさらに力をそそぐ必要があるであろう。

その際、大量の情報の中から利用者の必要な情報を容易に選択できるシステムあるいは情報源毎に異なるユーザインターフェースをいちいち修得しなくても済むような多種多様な情報元に対して、統一的なユーザインターフェースを提供するゲートウェイ機能などを提供する必要がある。

(すずき けいじ：附属図書館情報サービス課

相互利用掛長)

## 研究成果

## 島 文次郎 本館初代館長略伝

廣 庭 基 介

## 1. 島館長の図書館界への功績

本館歴代館長の内、初期の館長では、『広辞苑』の作者である新村出第三代館長の名が放つ大きな光芒のために、初代の島館長の名はヴェールがかけられたように薄れ、本学の教官方でもその名を御存知ない方が多いようである。

私は1959年に『京都大学附属図書館六十年史』の編纂に携わったことを契機として、本学図書館をわが国有数のレベルに育てて来た明治期の先輩職員の事蹟などを追跡するようになった。その結果、わが国図書館界にとって、忘れられてはならない重要な事蹟が島初代館長によって幾つか果たされたことが明らかになった。ここでは、先ずそれを紹介することから始めたい。

島館長の功績の第一に挙げるべきは、本学図書館創設の1899（明治32）年12月11日から僅か1カ月後の1900年2月4日に、図書館事業の啓蒙と研究を目的として、関西文庫協会を設立し、その機関誌として、日本初の図書館雑誌となった『東壁』を創刊したことである。（東壁は中国の正史『晋書』の「天文志」に、文籍を司る二つの星の名前で、この二星が明るければ、書籍が集まり、道術行われ、小人退いて、君子がきたる、という所からとったといわれ、名付け親は、後に文学部教授、人文科学研究所初代所長となった狩野直喜博士といわれている。功績の第二には、前述した関西文庫協会発会式において可決された同協会会則において機関誌に触れて「第4条 雑誌ニハ図書館学“ビブリオテクス、ヴィセンシャフト”ニ関スル論説記事及本会報告ヲ掲載シ之レヲ世ニ公ニス」とあり、これ又わが国で初めて「図書館学」という語彙を明示したことである。

第三に、木下広次本学初代総長も同じ意見をもっていたのであるが、島館長は京大附属図書館を一般公衆に公開する方針を一貫してもっており、実際に公衆用閲覧室の建築予算を在任中（明治33年より同43年まで）毎年要求し続けた

ことを挙げたい。これは実現しなかったけれども、明治期の帝国大学にあっては、驚くべき先見性、開明性であった。

以上に挙げた3点の事蹟は、京大だけを対象にした問題ではなく、わが国の図書館史上に明記されるべきものである。

一方、本学の図書館にとっての功績は、次節以後にも触れるが、一言で言うなら、司書職員を率いて、創設期につきものの困難な諸問題を次々にクリアし、その上に本館の内容を、単に一大学図書館というに止まらず、あらゆる館種を含めても、本邦有数の地位に育て上げ、司書養成の面でも、戦前の文部省主催図書館職員講習会に毎度講師を勤める優秀な司書を輩出させ、その名声のゆえに、初期蔵書の核となる多くの寄贈書籍を招来して、一層内容を充実させる基盤を作ったことである。

## 2. 島館長の生い立ち

島館長は元姓を野口といった。1871（明治4）年10月6日、父・野口常共と、母・恵以子の間に誕生した。生誕地が父祖の地・長崎県諫早が、明治政府の太政官に出仕した父の任地・東京か、は不明である。父は松陽と号し、佐賀鍋島藩支藩諫早領の学校好古館に学び、かつ同館の教諭福田渭水宅に住み込んで教えを受け、さらに22歳までに2度にわたり、播州林田建部藩の勤皇派の儒者・河野鉄兜（コーノ・テット）の塾に留学し、1864（元治1）年諫早に帰って、母校好古館の教諭に任じた。島館長の姓が野口から島に変わったのは、この河野鉄兜塾に、豊後府内大給藩出身の勤皇志士で、維新後、初代岩手県知事となる島維精が暫時遊学した際に、どちらが申し込んだものか不明ながら、島姓への移動が行われたと考えられる。1871（明治4）年、松陽は官途に就くべく上京。太政大臣三条実美に漢詩と能書の才を認められ、太政官8等出仕に就職した。島文次郎が生まれたのは、丁度その頃であった。松陽は1877（明治10）年、内閣少書



記官に昇進。上司・同僚に川田剛（歌人川田順の父）久米邦武（後に東大教授を不敬罪で逐われ、早大教授となる）巖谷修（童話作家巖谷小波の父）などがあつた。しかし、1879（明治12）年宿病を発し、退官して養生に専念するも、1881（明治14）年、39歳にて永眠。時に島（以後敬称、職名などを略し、島とする）は9歳であつた。

島は1896（明治29）年、東京（帝国）大学文科大学英吉利文学専修を卒業、同時に大学院に進学した。文科大学の同期卒業生には姉崎正治（嘲風）・高山林次郎（樗牛）・喜田貞吉・黒板勝美・大町芳衛（桂月）・笹川種郎（臨風）・幸田成友（露伴の弟）・内田銀蔵・原勝郎・佐々政一（醒雪）・桑原隲蔵（桑原武夫の父君）・岡田正美など多士済々で、島も含めて、世に『29年組』と囃されたくらいで、このメンバーが帝国文学会を組織し、雑誌『帝国文学』を創刊したのであるが、その初代編集室は森川町にあった島の自宅におかれていた。

島が東大大学院で『エリザベス朝時代の戯曲』の研究を続けていた27歳の1899（明治32）年2月24日、京都帝国大学から、将来館長に補する含みをもって『図書館の事項研究』という曖昧な名称の依頼を受けた。これが京大図書館との縁の始まりであつた。この依頼と承諾の文書は、図書館の庶務関係往復文書綴りに綴じ込まれている。しかし、30歳にもならない大学院生に対して、何故、誰がこのような依頼を発することを決めたのか、を語る史料は見当たらない。ただ、内藤湖南の弟子で、元台北帝大教授、京都国立博物館長を勤めた神田喜一郎は自著『敦煌学五十年』において、大意次のように推測している。「首都から一地方都市に落ちた京都在住の学者達は、京都帝大の創設前夜、一体どんな博学の（或いは浅学の）知識教養を備えた学者が東京からやってくるのか、と冷淡な態度で迎えようとしていた。木下広次総長は京大図書館の初期蔵書を急速に充実させる一法として、学内外の有志から圖書の寄贈を受けたい意向を開設以前から表明していたが、図書館長の人物如何によっては、それも進捗しない恐れがあつた。そこへ島館長の任命が行われたので、島館長なら、野口松陽の次男であるし、松陽が青年時代に

に河野鉄兜（コーノ・テット）の塾に遊学し、詩と書をよくした秀才であつた上に、長男の寧斎も漢詩人としてよく知られていたことが良い作用をした。京都には鉄兜に敬愛の情をもつ学者・蔵書家が多かつたのである。中でも富岡鉄斎と謙蔵父子、山本行範、猪熊浅麿、山田永年など、京都在住の第一級の文化人達が、若い島図書館長に対して親しみの感情を持ってくれたことが、附属図書館のみならず、京大そのものへの京都文化人の態度・感情を和らげるのに役立ったことは測り知れなかつた」と推測している。島に「任法科大学助教授、高等官7等、補付属図書館長」の辞令が出たのは1899年（明治32）年11月6日付けであつた。時に満28歳を迎えたばかりであつた。法科大学に籍をおかれたのは、1900（明治33）年まで文科大学が無かつたため、図書館長の職に最も相応しい分科大学が法科であつたからであろう。その1カ月後の12月11日に図書館が開館し、さらに2カ月後の1900（明治33）年2月4日、本稿第1節で述べたように関西文庫協会の発会式を、図書館閲覧室を会場として、44人の参加者と共に挙行したのであつた。

島は開館以後、主として名古屋以西、時には東京・栃木も含めて、各地の蔵書家や寺社を廻って、貴重な蔵書や古文書の臨写や寄贈の依頼を精力的に行つた。館務の執行に当たっては、全館員会議を開き、業務の改変・臨時職員の採用・物品の購入などに至るまで、最も軽い職位の者にも発言を許し、自ら事務用目録主任、寄贈図書監督などを担当して、先頭に立って働いた。1901（明治34）年には大閲覧室に電灯設備が設置され、午前8時から午後9時までの開館時間となった。それまでは、暗くなると利用できなかった代償として5月から9月までは午前7時から開け、大祭祝日日曜日でも開館していた。また、1908（明治41）年12月、図書館に関する総長からの諮詢に応じ、図書館長、各委員の提議事項を審議するために、各分科大学長、教授各1名よりなる附属図書館商議会を設置するなど、草創期の図書館を熱心に唱導したのであつた。

### 3．島館長にふりかかった非運

しかし、逆風が東から吹いてきた。すでに1901（明治34）年頃より、東京に住む実妹野口



曾恵に、竹林男三郎という、東京外語学校ロシア語科を中途退学した男が求愛していたが、兄・寧斎の忌避に遭っていた。そのような状況下の1904（明治37）年、曾恵が女兒を出産すると、野口家に風波が絶えず起こるようになる。寧斎は、森槐南門下で、明治期の漢詩人の五指に入る著名な漢詩人であった。寧斎門には副島種臣、伊藤博文、乃木希典などの元勲や将軍があったことから著名度がわかる。一方、寧斎は宿病に悩んでいた。島の祖父・野口良陽が、旧藩時代、医者として診療中にハンセン病に罹ったといわれ、不幸にも寧斎にそれが顕著に発病したらしい。1905（明治38）年5月、寧斎は自宅にて38歳で急死した。前記の竹林男三郎は、この病気が遺伝病であると信じ、それが曾恵に発症するのを防ぐために、当時の迷信に従って、通りすがりの子供を殺害して腎肉を切り取ったという容疑、同時に自分を嫌忌している寧斎をも殺害した容疑、さらに、その頃起こった麹町の薬店主殺しの容疑と都合三つの殺人容疑をかけられて逮捕され、花井卓蔵らの弁護により前2件は無罪となったが、薬店主殺害が有罪となって、1908（明治41）年処刑されてしまった。現在でも、男三郎は冤罪であったとする説もあり、明治期最大の疑獄事件と評されている。日露戦争勝利の報道が静まると、俄然、この事件が新聞紙上を賑わし、添田唾蟬坊の演歌にも『嗚呼、世は夢か幻か』と謳われて一世を風靡したのであった。当時の時代性として、如何に島が無関係と判っていても、いやしくも帝国大学の図書館長ともあろう者の係累が、嫌疑だけとはいえ、刑事事件の加害者と被害者に擬せられた上、実兄がハンセン病患者であった事実まで伝えられたことが、島にとってマイナスに働かない筈が無かったと思われるのである。

これに追い撃ちをかけるように、島を陰に陽に支持してきた初代総長木下広次の持病の結核が悪化し、1907年依願退官、1910（明治43）年8月、59歳で逝去したことは、島をして、全学の図書館行政の長として勤務する意欲を失わせるに足るものであったと推測される。

島は、木下総長の病状が危険となった同年7月25日付けをもって、図書館長の職を依願退職

し、以後は第三高等学校教授を本官、文科大学教授を兼官とする英語・英文学の研究・教育の世界に帰って行ったのである。しかも、島は1923（大正12）年3月には、還暦までに9年も残したまま、すべての官職を辞任してしまったのであった。もっとも、1927（昭和2）年から京都女子高等専門学校の親授待遇の英文学講師に就任し、1943（昭和18）年まで16年間勤務した。その就任早々の1928（昭和3）年、20歳年下の京都女子高等女学校教諭であった高井トラエと遅い結婚を迎えたことは、数少ない朗報であった。島は太平洋戦争敗戦から2カ月後の1945年10月10日、腎臓病により74歳をもって永眠した。墓は洛東鹿ガ谷法然院にある。

（付記）図書館とは直接関係しないが、島の逝去後、木方庸助（神戸外大、京外大） 中西信太郎（京大） 黒田正利（岡大） 堀正人（関大） 深瀬基寛（京大） 岡本隆男（京女大）など、英文学での教え子が、島の思い出を雑誌などに発表し、いずれも、島が不幸にめげることなく、毅然として、堂々と生涯を生き抜いた“人生の達人”と評し、特に島夫妻と京都女子学園で同僚として勤務した岡本隆男は、夫妻の優しい生活態度を敬慕し、筆を極めて称賛している。

参考文献：田中真治編『鉄兜及其交友の尺牘』西播磨新聞社 昭和4刊、

神陵史編集委員会編『神陵史---第三高等学校八十年史---』三高同窓会 昭和55刊、

長崎県教育会編・発行『大礼記念長崎県人物伝』大正8刊、

京都大学附属図書館編・発行『京都大学附属図書館六十年史』昭和36刊、

関西文庫協会編『東壁』（復刻版）学術文献普及会 昭和49刊、

木方庸助筆『島文次郎先生を懐ふ』（『英語青年』May 1, 1946）、

岡本隆男筆『牧愛舎雑筆（2）---心の絆は切れない---』（こころの会の雑誌『心』第7号、1985.6刊、堀正人の文は『京大英文学会報』第2号、中西信太郎の文は京大英文学会機関紙『ALBION』NS.No.2（March 1953）

黒田正利の文は同じ『ALBION』NS.No.5（Nov., 1956）

深瀬基寛の文は京大教養部英語教室編『英文学評論』第4輯（昭和32.3）

（ひろにわ もとすけ：元法学部図書室整理掛長 現花園大学助教授）

## 弁慶像の展開 - 御伽草子『弁慶物語』 -

池 田 敬 子

### 1

源義経という人気の高い歴史上の英雄は、「弁慶」という腹心の家来を伴った姿で我々に記憶されている。主君義経についての様々な逸話は弁慶の助力を得て完成される場合も多く、特に晩年の悲劇の主人公義経には、常に彼をかばい支える弁慶の姿を欠く事ができない。

このように密着した主従のありかたを作りあげたのは『義経記』の功績である。『義経記』は、義経の生涯のもっとも華やかな時代であった源平合戦の頃については『平家物語』諸本に譲る形でほとんど具体的叙述をせず、その前後の時代 - 少年時代と晩年 - に焦点を絞って物語を構成する。というより『義経記』の方法は、義経についての様々な説話を集大成していくのだが、少年時代と晩年の説話を熱心に蒐集したということなのである。そのことは、それだけ多くの説話がすでに生まれていたことを示すのである。義経の晩年を支えた弁慶の描写があるためには、弁慶がいかにしてそれ程の家来になったかといういきさつについての説話も必要になってくるだろう。『義経記』には義経と弁慶の出会いを描く場面があり、さらにそれ以前、弁慶の出生と成長を描く部分もあって - それはほぼ巻三全体をしめる - 、武蔵坊弁慶という人物に関する説話も『義経記』に取り込まれる前から、義経説話とともに成長を遂げていたことがわかるのである。

それはおそらく『平家物語』が成長していく時代と重なるのであろうが、『平家物語』には弁慶の影は薄い。義経についてもその晩年は簡略に済ませる『平家物語』であるから、弁慶にいたるまでは『平家物語』編集者の関心を大きくひくことはなかったのであろう。『義経記』の出現は、この意味でも必要であった。『義経記』は前述のように『平家物語』が描かなかった時期の義経を描き、弁慶を描いた。それがさらに次の興味を引き出すのである。『義経記』の成立はおおむね室町時代初期といえる頃と考えられる

が、おそらくそれより少し遅れて『義経記』が描かなかった時期の弁慶を描く作品が登場する。御伽草子（室町物語）『弁慶物語』である。

### 2

『弁慶物語』は、『義経記』巻三をふくらませたような作品である。とはいえ、登場する弁慶の人間像は少し異なるのだが、このことは後述するとして、まず『義経記』巻三の内容と簡単に比較しておく。『義経記』巻三は大きく三つの段落に分けることができる。

まず第一は弁慶の誕生と比叡山に登り悪行によって追い出されるまで、第二は書写山炎上と義経との出会い、第三は義経と弁慶を保護したかどで四条上人が捕らえられ義経が都を去るまで、である。

一方、『弁慶物語』は『義経記』の内容を含みつつ（ただし異同あり）上述のそれぞれの段落の間に独自のかなり長い説話を加えて物語を構成する。特に第一と第二の段落の間に相当する部分には四つの説話を加えており、書写山へ行くまでの弁慶の愉快的悪戯を書き連ねている。第二と第三段落の間に相当する部分は『義経記』とは異なり、四条上人は登場せず、弁慶の比叡山での師匠が捕らえられその救出作戦となっており、晩年の義経主従のありかたを暗示するような義経と弁慶の青年時代の姿を描いて物語を締めくくるのである。

このように『弁慶物語』は、『義経記』が描き尽くしたともいえる晩年については一切カットし、青・少年時代の弁慶を『義経記』の叙述の隙間を縫うように描く作品、ということが出来る。このような物語は、『看聞日記』永享六年（1434）十一月六日条に、「内裏物語御用之間、史漢物語六巻武蔵坊弁慶物語二巻献之」という記録が見えるように、既に室町中期には作られていたものと考えることができ、『義経記』の出現に刺激されるように、弁慶の物語がまとめられていったと思われるのである。そして室町末期から江戸時代初期にかけて写本・絵巻物・奈良絵本が作られ、古活字本や製版本も江

江戸時代には刊行された。

ここで、現在知られている『弁慶物語』の諸本の主なものを紹介しておく。

穂久邇文庫蔵絵巻『武蔵房弁慶物語絵巻』

#### 一 軸

室町中期以前成立、前述の『看聞日記』のいう「武蔵坊弁慶物語二巻」に近いものかとの説あり。現存する最も古いものだが冒頭と書写山と最後の部分を欠く

東京大学国文学研究室蔵写本『弁慶物語』二巻（全三巻の下巻欠、上巻も末尾に欠あり）

室町末期写か。途中に「天正十一年」の年号を含む書き入れあり。

チェスター・ビーティ図書館蔵絵巻『武蔵房弁慶絵縁起』三巻

室町末期写か。記事内容や巻分けに と共通部分あり。

京都大学国語学国文学研究室蔵写本『弁慶物語』二巻

江戸初期書写か。

独自増補記事や巻分けに他諸本と異なる工夫あり。

国会図書館蔵写本『辨慶物語』二巻

元和七年写の奥書あり。

京都大学附属図書館蔵奈良絵本、下巻のみ一冊

本文は製本版に近い。

古活字本

大東急記念文庫・竜門文庫などに蔵。慶長・元和・寛永ごろに刊行。

製版本

慶安四年刊・貞享二年刊が知られている。

古活字本と製版本は一括する形で掲げたが、異同が多いのは から の写本群である。異同といっても大幅なものではなく、御伽草子の諸本にしばしば見られる新しく編集される際の編者による工夫または改変の類いであるのだが、これが御伽草子（室町物語）の制作や享受に関わった人々の関心や教養などの実に種々様々なものを我々に示してくれる非常に興味深いものである。

### 3

ただし、『弁慶物語』における弁慶の人間像はおおむね一致しており、その意味で弁慶像の推移は、『平家物語』の断片的叙述からはよくわからないいささか怪しげな義経家臣群の一人という段階から、『義経記』が作り上げた異常出生譚をもつ申し子、比叡山の悪僧から義経の腹心の家臣へ

の変貌という路線の延長線上にある。しかしやはり『弁慶物語』は弁慶を主人公にたてる物語である、いや「弁慶」に主要な関心を抱くところから作り上げられた物語である点で、『義経記』の叙述から読者が抱く弁慶像よりもはるかに愛すべき人物に展開しているといわねばならない。『義経記』と共通する比叡山での悪行や書写山炎上や義経との出会いの場面であっても、『義経記』より遙かに天衣無縫、一種喜劇的な描写がなされていて、残忍な悪行というイメージは薄らぎ子供の天真爛漫な悪戯という雰囲気漂っている。しかも平家に捕らえられた比叡山での師匠を救出するところには、しみじみとした師弟愛が描かれてもあり、『義経記』巻三では全くみられなかった新たな弁慶像が創出され、それが青年義経との友情に近いような人間関係を作り上げ二人で奥州へ向う結びにつながり、物語を超えて晩年の義経を支える弁慶へと結びついていく。『弁慶物語』は、『義経記』が作り出した弁慶像を、その叙述の隙間を縫うように新たな場面を付け加えつつ、物語が意図する弁慶像へと巧みに変貌・展開させていったということができよう。新たに物語を編集した成果は十分あがっているといわねばならない。

これら『弁慶物語』諸本のなかでも 京大国文研究室本の独自異文はなかなかおもしろい。編集ミスと思われる文意の通じないところもあったりするのだが、飲酒戒の条や書写山への道行文、あるいは屁理屈ともいえるような論理を弁慶に語らせて次々と事件の展開を招く手法など、他の写本類とは趣を異にする性格があり、京大本の編集者への興味も大いに喚起される。

『弁慶物語』は、新日本文学大系『室町物語集』に採録されたことで今後研究が活発になると予想されるが、現状ではまだ写本群の成立順序も明確になっているとはいえない。果たしてを物語の最も古いものといってよいのかどうか不審な点もあり、新たな五巻の絵巻が発見されたという話もある。今後、諸本の調査と本文の研究がより進めば、弁慶の人間像はさらに展開していくかもしれないし、江戸時代の浄瑠璃などの後代の弁慶像への道筋が一層はつきりに見えるようになるだろうと期待したい。

（いけだ けいこ：京都府立大学文学部教授）



## 京都大学附属図書館100年の歩み

(1897) 明治	30. 6.18	京都帝国大学創設。「附属図書館、同館長」の名称が明記。
	31. 7.	附属図書館最初の建築として第一書庫完成。
	32. 7.	閲覧室、事務室が竣工。
	32.11. 6	法科大学助教授島 文次郎 初代附属図書館長に補せられる。
	32.11.29	「京都帝国大学附属図書館規則および執行手続」を定める。
	(1899) 32.12.11	開館（創立記念日）。学生に閲覧證を交付。
	33. 1. 5	島 文次郎、秋間琢磨、笹岡民次郎の諸氏が「関西文庫協会」の設立を発起。
	34.12. 4	閲覧室に電燈装置を完備し、夜間開館を実施（午前8時[夏期は7時]～午後9時）。
	35.11. 1	法科大学に分館を設置し、新聞、雑誌の閲覧を開始。
	36. 4.	第2書庫増設。
(1918) 大正	36. 4.12	京都帝国大学内に尊攘堂が竣工し、維新資料を保管。
	41. 6. 2	司書官及び司書の職制が置かれた。
	41.12. 1	「附属図書館商議会議程」制定。
	42. 2.17	第1回附属図書館商議会議開催。
	43. 7.25	島 文次郎館長を免ぜられ、事務官石川 一を館長に補せられる。
	44.10. 1	石川 一館長を免ぜられ、文科大学教授新村 出館長に任命（在任26年間）。
	7. 3. 31	富士川本寄贈される。
	11. 6.18	本館創立25周年記念式典。
	13. 6.	第1次帝国大学附属図書館協議会（東京帝大）。
	14. 7.	鉄筋コンクリート4階建の第3書庫完成。
(1930) 昭和 (1934)	5. 4.	指定図書制度が確立され且実施される。
	8.	法経学部新館西翼2階に第2閲覧室を開室。
	9. 2.	本学蔵書100万冊突破。
	11. 1.24	午前10時50分頃、第1閲覧室より出火、同室全焼。
	11. 9.15	本部（時計台）大ホールに仮閲覧室開室。
	11.10.19	文学部教授羽田 亨館長に任命。
	14. 1.17	経済学部教授本庄榮治郎館長に任命。
	17. 9. 1	文学部教授澤潟久孝館長に任命。
	19. 6.13	貴重文献の疎開を実施（嵯峨大覚寺宝蔵、府下南桑田郡保津村古川末造所有土蔵へ3,054冊を疎開）。
	20. 8.14	第2回図書疎開（北桑田郡知井村、同郡神吉村）。
	22. 5.31	文学部教授原随園館長に任命。
	22.10.	京都帝国大学附属図書館は京都大学附属図書館と改称。
	23. 2.	本館新築完成し、事務室及び閲覧室の移転を実施（旧館）。
	23. 3. 9	京都図書館学校本館に開校（～24/3）。
		国立国会図書館設置。
	24. 6.30	本館内にクルーガー図書館開館（一般公開）5ヶ月間運用。
	24.11. 8	文学部教授泉井久之助館長に任命。
	24.11. 3	泉井館長図書館視察のためアメリカ出張（～26/3/3）。
	26. 4. 7	第1回近畿地区国公立図書館協議会。
	26. 7.11	文部省主催図書館専門職員養成講習会本学で開催（～9/10）。
	28.	本館北翼に陳列室完成。
	29.10.11	第1回全国国立大学図書館長会議。



(1956) 昭和	31. 7. 1	「附属図書館マイクロフィルム複写取扱内規」制定。
	32. 7.15	法学部教授田中周友館長に就任。
	32.12. 1	地磁気資料センター事務室開設（世界4ヶ所の内の1カ所）。
	33. 1.	「文献複写会」結成。
	34. 4.	アメリカ研究センター図書室開室（本館地階）。
(1961)	34.10. 3	岩猿事務長ALA主催「日本の図書館員のための図書館参考奉仕に関するアメリカセミナー」に参加のためアメリカ合衆国に海外出張。
	34.12. 9-10	本館創立60周年記念回顧展開催。
	34.12.11	同上 式典開催。
	36. 3.30	『京都大学附属図書館六十年史』刊行。
	36. 4. 1	附属図書館部課制実施（整理課と閲覧課を設置）。
(1964)	36.12.18	本学蔵書200万冊突破。
	37. 5. 1	田中館長海外出張（アメリカ他）。
	38. 7.15	田中周友館長退任、足利惇氏館長事務取扱。
	38. 7.25	経済学部教授堀江保蔵館長に就任。
	38.12.	開架閲覧室開設。
(1964)	39. 9.	館報『静情』創刊。
	39.12.11	「京都大学図書館改善特別委員会」発足。
	40. 6.23	HRAF（Human Relations Area Files）資料室開設、利用サービス開始。
	41. 4. 1	図書館改善特別委員会が図書館運営近代化策について行ってきた討議をまとめ「京都大学附属図書館報告書」を完成。その内容は学習図書館、総合図書館、研究図書館、保存図書館の機能分析を通じて附属図書館と各部局図書室の機能分担をハーバード大学のブライアント館長の主唱する「調整された分散主義」に近い形でまとめたものであった。
	41. 7.25	電子複写式による文献複写業務開始。
(1964)	42. 7.	工学部教授穴戸圭一館長に就任。
	43. 4. 6	本館大閲覧室に冷房装置設置。
	43. 6. 7	新聞閲覧室開設。
	43. 7.26	全国国立大学図書館長会議を改組し、全国国立大学図書館協議会と改称。
	43.	第2閲覧室と雑誌室を開設。
(1964)	44. 5.15	学内全般の図書利用促進のため「学内図書相互利用書」の様式を統一。
	44.12.24	第1回日米大学図書館会議（東京）。
	45. 2.13	商議会上、大学改革の中での「図書館問題を考えるための委員会」を設ける。第1回会議を開催。
	46. 3.	図書館職員による「大学図書館改革問題懇談会」スタート。
	46. 4. 1	商議会上にて上記委員会の報告をまとめた。その内容は附属図書館のほかに医学図書館、社会科学図書館、人文科学図書館、農学図書館、宇治地区自然科学研究図書館などのほか部局単位に構成されるものも考慮した京都大学のライブラリー・システムの試案を提示し、さらに図書館業務の機械化についても提言している。
(1971)	46. 5.18	人文科学研究所教授平岡武夫館長に就任。業務機械化委員会設置。
	47.10.15	本学蔵書300万冊突破。
	48. 4. 1	第2回日米大学図書館会議（アメリカ合衆国）。
	49. 4. 1	法学部教授林 良平館長に就任。
	50. 1.20	総務課設置、3課となる。
(1971)	50. 5. 6	商議会上「附属図書館運営改善に関する委員会」を設ける。
	50. 9.	「研究者の情報要求と利用に関する調査」5大学を対象に実施。
	50.10.28	商議員の構成で「学生用図書附属図書館選書委員会」が設けられる。
		附属図書館運営改善に関する委員会・第1小委員会で図書館近代化を答申し、そのために附属図書館の新嘗が必要であるとの見解が示された。
		第3回日米大学図書館会議（京都）。

(1976) 昭和	51. 3.	本館建物鉄筋コンクリート中性化試験実施。
	52.10.	蔵書10万冊移動。
	52.11.	附属図書館運営改善に関する委員会・第1小委員会『附属図書館の改築と改善に関する意見書』をまとめ答申。
	53. 1.	附属図書館運営改善に関する委員会・第2小委員会『附属図書館の管理・運営に関する意見書』をまとめ答申。
	53. 5. 6	商議会に機械化等に関する委員会設置。
	53. 7. 4	商議会に施設サービス委員会設置。
	53. 7.	商議会に建築委員会設置。
	53.10.	開館時間延長（午後7時から午後8時へ）。
	54.12.11	附属図書館創立80周年記念式典（展示会、図書目録の機械化実験デモ）。
	55. 1.29	学術審議会『今後における学術情報システムの在り方について』答申。
	55. 4. 1	学術情報掛新設。
		開館時間延長（午後9時まで）。
	55.10.	「学術情報問題調査検討委員会」（林委員長）中間答申。
	56.	国立国会図書館 Japan MARC頒布開始。
	56. 1.	附属図書館新営に関するWG発足。
	56. 3.27	商議会 附属図書館新営計画決定、新営に当たっての全学的図書収蔵計画決定。
	56.12.26	附属図書館新営着工。
(1982)	57. 1.26	本学蔵書400万冊突破。
	57. 4. 1	工学部教授高村仁一館長に就任。
	57. 7.19	図書館業務機械化準備作業班設置要項（館長裁定）。
	58. 1. 1	附属図書館に国立国会図書館分類表（NDLC）採用。
	58. 4. 1	閲覧課相互協力掛新設。
	58.10.20	附属図書館新館竣工（建築面積 2,477.86㎡、延床面積 14,011.25㎡）。全学校費からの予算配分を得る。
	59. 4. 1	工学部教授西原 宏館長に就任。 書庫掛、学術資料掛と名称変更。
	59. 4. 9	新館開館、小型電算機（V830）による閲覧システム導入、工学部化学系雑誌の集中配置（工学部図書掛4階へ）。
	59.12.24	附属図書館調査研究室設置。
	60. 1.	バックナンバーセンター利用開始（約11万冊 6,400title）。
	60. 1.	京都大学規程および京都大学附属図書館図書館商議会議程全面改正。文献情報センター所管学術情報システムに参加、FACOM M-340 および端末27台導入（内6台は部局）。
	60. 4.	整理課学術情報掛および閲覧課参考調査掛を設置。
	60. 6.	東京大学文献情報センターと接続開始。
	60. 9. 9	学内図書館（室）文献相互利用制度発足。
	60.11.	附属図書館オンライン情報検索サービス（JOIS、Dialog）開始。
	61. 4. 1	文学部教授西田龍雄館長就任。
		AVブース室利用開始。
	62. 3.20	附属図書館における学外者の利用に関する考え方（骨子）制定。
(1990) 平成	62. 6. 2	理工学系外国雑誌センター館の指定を受ける（484title）。
	63. 2.29	『京都大学蔵大惣本目録』（第一分冊）刊行（H.2年3月3分冊完結）。
	63. 3.	『新入生のためのLibrary Guide』発行、以後毎年発行。
	63. 4. 8	課・掛名称変更、情報管理課（旧名整理課）情報サービス課（旧名閲覧課）雑誌・特殊資料掛（旧名学術資料掛）。
	63. 9. 1	オンライン目録検索（OPAC）運用開始。
	64. 7. 1	「近畿北部地区国立大学図書館機械化連絡委員会」設置。
	64. 7. 6	英文利用案内の作成。
	2. 1.	附属図書館電子計算機更新（FACOM M-360）端末108台。利用者端末6台に。

(1990) 平成	2. 2.19	電算化にともなう目録講習会。
	2. 3.26	「京都大学における図書館資料の不用決定および廃棄に関する取扱要領」制定。
	2. 4.	学内LAN「KUINS」運用開始。
	2. 8.	CD-ROMによる検索開始。
	2.10.	OPAC/TSS運用開始。
	3. 3. 3	電子ファイリングシステム(EFS)宇治地区間と運用開始。
	3. 3.	貴重書指定等審査委員会(第1回)開催。6点を新たに指定。
	(1991) 3. 7.31	附属図書館報『静情』通巻100号(Vol.28,no.1)。
	3. 9.18	本学の蔵書500万冊突破。
	3.10.	『鈴鹿本今昔物語集』寄贈される。
	4. 4. 1	文学部教授朝尾直弘館長に就任。NACSIS-ILLシステム利用のサービス開始。
	4. 5. 1	官公庁完全週休2日制 土曜開館(10:00-17:00)。
	4.10. 6	第5回日米大学図書館会議(東京 ~10/9)。
	4.10.12	日米ワンデイセミナー開催(京都外国語大学)。
	5.10. 4	放送大学学生に利用証交付。
	6. 1.	附属図書館電算機更新(M-1400/20)稼働開始。
	6. 9.26	「吉田松陰とその同志」展で電子図書館実験システム(Ariadne)による電子展示。
	7. 1.17	阪神・淡路大震災発生 神戸地区を中心に被害甚大。
	7. 1.	神戸商船大学附属図書館(1/26, 3/22-27)、神戸大学附属図書館(2/13-15)復旧支援。
	7. 3. 6	『京都大学附属図書館の将来構想(中間まとめ)』商議会へ提案。
	7. 4. 1	工学部教授長尾 真館長に就任。
	7. 4.18	附属図書館商議会専門委員会開催(第1回)。
	7. 5.	日曜開館スタート(10:00-17:00)。
		CD-ROMサーバ・ネットワーク検索システム運用開始。
	8. 1.	インターネットホームページ開設。
	8. 4. 1	附属図書館研究開発室設置(学内措置)。
	8. 4. 5	館内リニューアル(入退館機の更新、新聞雑誌閲覧コナの新設)。
	8. 6.	『鈴鹿本今昔物語集』国宝に指定。
	8. 6.26	次期システム全学検討会議(於AVホール)。
	9. 4. 1	工学研究科教授万波通彦館長に就任。
		電子情報掛新設。和書目録情報掛と洋書目録情報掛は目録掛となる。
	9. 6.	商議会に電子図書館専門委員会設置。
	10. 1. 6	電子図書館システム稼働(電子図書館化推進経費予算化)。
	10. 3.	総合情報メディアセンター端末を附属図書館内に配置。
	10. 3. 2	電子図書館システム披露式開催。
	10. 4. 1	経済学研究科教授菊池光造館長に就任。
		電子図書館システム本格稼働。
	10. 4.13	全学共通科目「情報探索入門」(提供部局および附属図書館)開始。
	(1999) 11. 7.12	全学図書館・室対象に利用者アンケート調査実施(~7/23)。
	11.10.22	本学OPACデータ入力100万冊突破
	11.11.29	附属図書館創立100周年記念式典(公開展示会、記念講演会)

## 京都大学附属図書館展示会の歩み

<b>明治</b> 33.12.10 - 11 34.12. 8 - 10 36. 4.12 - 13 37.12.11 - 12 39. 4. 1 42.12.10 - 12	附属図書館創立 1 周年記念展覧会 附属図書館創立 2 周年記念展覧会 尊攘堂竣工、本館創立 3 周年記念展覧会 附属図書館創立 5 周年記念展覧会 西洋図書展覧会 附属図書館創立10周年記念医書展覧会
<b>大正</b> 4.11.12 - 13 7. 4.20 8. 5.10 11. 5.12 - 13	大典奉祝陳列展覧会 京都帝国大学附属図書館展覧会 日本書紀編纂1200年記念展覧会 日英関係史料展覧会
<b>昭和</b> 3.12. 3 - 7 5. 5.18 12.11.21 - 23 17. 6.18 19. 6.18 22.10.26 - 27 23.10.30 - 31 25. 6.29 - 7. 1 26. 3.28 12. 8 27. 6.21 28.10.31 - 11. 1 29. 4.19 - 5. 8 6.18 - 25 10. 9 - 15 30. 3.29 - 4.10 6. 9 - 11 10.28 - 11.12 31. 5.21 - 26 6. 9 6.16 - 20 9.17 - 22 10.29 - 11. 2 32. 2.18 - 27 10.21 - 26 11.14 - 20 33. 7. 4 - 8 10.15 - 18 10.27 - 11. 8 34. 4.30 - 5. 2 5.13 - 15 9.17 - 19 11. 2 - 7 12. 9 - 12	大典奉祝勅版官版及藩版図書展覧会 本学創立記念図書展覧会 近衛家寄託書展覧会（共催：文学部支那学会） 戦争に関する新聞展 西園寺公関係図書展 本学創立50周年記念附属図書館所蔵貴重書展 本館所蔵貴重書展 新着米国図書展示会 イスパニヤ文庫展 清家（舟橋家）旧蔵本展（共催：文学部支那学会） 佐藤家寄贈和算図書展 近世文学展 本学創立第57周年記念資料展 西洋古文献展 朝鮮古文献展（共催：文学部朝鮮学会） 医学関係稀覯図書展 シラー没後150周年記念展（共催：文学部ドイツ文学研究室） 図書館学関係及び稀覯図書展（共催：日本図書館学会） 図書及び印刷の変遷史展 ハイネ百年祭記念展（共催：ドイツ文学会） 北村季吟250年記念展 附属図書館所蔵重要文化財図書展 私家限定版袖珍本展 イタリア図書展 谷村文庫展 法隆寺資料展 イタリア図書展 維新資料展 奈良絵本展 重要文化財図書展 京都祭礼関係図書展 徳川本源氏物語絵巻複製展 読史会創立50年記念（共催：文学部読史会） 附属図書館創立60周年記念回顧展



昭和	36. 4.20	浮世絵師さし絵本展
	5.23	英国新刊学術図書展（共催：英国文化振興会出版文化国際交流会）
	11. 7	書物の歴史展
	37. 2. 9	大仏左掌拓本展
	4.10 - 14	貴重書展
	5.12 - 14	上方蘭学者展
	10. 2	源氏絵巻展
	12.17	ソ連学術図書展（共催：出版文化国際交流会）
	38. 4.10 - 13	日本文学貴重書展
	6. 3 - 6	谷村文庫展
	10.29 - 11. 1	維新資料展
	11.21	英国書写名品展（共催：英国文化振興会）
	39. 9.29	ルーマニア図書展
	10.28 - 30	北村季吟展
	40. 2. 9 - 12	アメリカにおけるアジア研究資料展（共催：京都アメリカ文化センター）
	4.12 - 15	京都大学貴重書展
	6.14 - 17	ダンテ図書展
	9.27 - 30	マグナカルタ写真展
	11. 9 - 11	歌人小沢芦庵没後165年記念展
	41. 4.11 - 14	維新資料展
	10.26 - 28	古記録展
	11.18 - 12. 3	現代フランス書籍展（共催：関西日仏学館）
	42. 4.11 - 13	京都大学貴重書展
	4.18	アメリカ ペーパーバック図書展
	4.24	英米大学出版局図書展
	5.22	米国政府刊行物展
	6. 5	エーリッヒ・ケストナー；その生涯と作品展
	7. 6	世界理工学図書・雑誌展（共催：出版文化国際交流会）
	9.18	イルザ・フォン・ライストナー彫刻展（共催：日独文化研究所／日本ゲーテ協会）
	11. 7 - 10	維新資料展
	43. 1.24 - 26	徳川・明治期心理学関係図書展
	4.11 - 12	京都大学貴重書展
	5. 8 - 22	トーマス・マン展覧会（共催：日独文化研究所／日本ゲーテ協会）
	45. 3. 9	ドイツ図書展（ドイツ新刊書展）（共催：ドイツ出版協会／出版文化国際交流会）
	4.27	OECD資料展示会
	5.13	英国図書展（共催：英国文化センター）
	46. 5.11 - 13	附属図書館所蔵貴重書展
	11.16	社会主義国図書展（共催：出版文化国際交流会）
	47. 5.24 - 26	京都の地誌・史料展
	11.20 - 22	京都諸家伝世本展
	48. 6. 6	絵巻物展
	11.20 - 22	附属図書館所蔵「古地図展」 - 東洋を中心として -
	49. 4.17 - 19	附属図書館所蔵貴重書展
	12. 3 - 5	附属図書館図書展「欧米人の見た近世の日本」
	51. 6. 9	英国二次資料展示会
	10.20	外国雑誌展示会
	11. 8 - 10	フランス社会思想史資料展
	52.10.25 - 27	法制史関係資料展（共催：法学部）
	11. 8 - 10	フランス新刊図書展（共催：出版文化国際交流会）

昭和	54. 5.14 12.11	フランス大使館寄贈フランス図書（自然科学）展 附属図書館貴重図書、二次資料展示会
	59.10. 1 - 5	世界の本展（共催：出版文化国際交流会）
	11. 5 - 9	京都大学附属図書館所蔵 重要文化財指定図書展
	60.10. 3 - 5	漢籍善本展覧会（共催：文学部）
	4.11 - 17	京都大学附属図書館善本展 - 京都諸家伝世本及び奈良絵本 -
	10.14 - 19	黎明期の新聞展
	11.14 - 16	経済学古典文献展示会（共催：経済学部）
	61. 4.11 - 17	近世京都展 - 景観・文華・生活 -
	11.20 - 28	洋学史資料展 - 近代日本学術の源流 -
	62.11.16 - 28	揺籃期の京都大学 - 創立90周年記念展 -
	63. 4.11 - 20	近世人の読書 - 大惣本をめぐって -
	11.15 - 22	ジャーナリズムの源流 - 経済学部所蔵上野文庫展 - （共催：経済学部）
平成	1.11.20 - 12. 9	維新資料展 - 屏風・器物・額 -
	2.11.27 - 12. 7	和漢書古典籍のさまざま
	3. 4.17 - 26	原典でみる 近代ヨーロッパ思想の歩み - 京都大学経済学部所蔵上野文庫展 - （共催：経済学部）
	11.14 - 22	東アジアの文字と文献（併設展：最近の貴重書）
	4.12. 1 - 9	洋学資料展 江戸期における翻訳の世界（併設展：重要文化財等の紹介）
	5.12. 1 - 10	京洛出版の軌跡 - 五山版、古活字版、八文字屋本 - （併設展：古典籍の修復と複製）
	6. 9.26 - 10.28	吉田松陰とその同志
	7.10.16 - 27	舎密局から三高へ（共催：総合人間学部）
	8.11.11 - 17	「今昔物語集」への招待 - 鈴鹿本「今昔物語集」国宝指定記念 - （同時展示・重要文化財指定図書）
	9.10.28 - 11.24	京都大学創立百周年記念展覧会「知的生産の伝統と未来」
	10.10.31 - 11.15	日本の西方・日本の北方 - 古地図が示す世界認識 - （室賀コレクション古地図展）
	11.10. 1 - 10. 5	京都大学経済学部創立80周年記念古典文献展示会（主催：経済学研究科）
	11.11.24 - 12. 7	附属図書館創立100周年記念公開展示会「お伽草子 - 物語の玉手箱 - 」

\* 詳細は、[http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/history\\_tenji.html](http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/history_tenji.html)をご覧ください。

## あとがき

本特集号は、附属図書館百周年記念事業のひとつとして編集したものである。巻頭言の長尾総長はじめ歴代附属図書館長からご多忙のところ玉稿を賜った。回顧編では、これまでにさまざまな形で附属図書館に勤務され、それぞれの時期に責務の一端を担い今日の附属図書館へと引継がれた方々から、当時の追憶や体験について寄稿していただいた。いずれもきわめて貴重な証言であり、図書館正史に現れていない事柄も多く図書館外史とも言える重要な記録となった。附属図書館百年のあゆみにも見られるように、明治、大正、昭和、そして平成へと長い歳月を経て、図書館システムもその業務も大きな変貌を遂げてきた。現在編で、図書館活動の現況として電子図書館に代表される現在の諸業務システムの概要を現スタッフが紹介した。展望編では、近未来の図書館システムについて展望をお願いした。商議員、院生、学生からいただいたご指摘は利用者からの声として、また、附属図書館に対する点検・評価と受け止めた。廣庭氏による本館創設期の島文次郎初代館長略伝に関する論文は百周年記念号に相応しい調査と研究の成果である。また、今回、池田氏に百周年記念講演会として御伽草子「弁慶物語」に関しご講演を願ったが、その講演梗概を掲載した。ご寄稿いただいたすべての方々に対し深甚の感謝を申し上げる。なお、今回の原稿依頼は、発行までの時間と紙幅の制約とから、ごく一部の方々にのみお願いするという結果となった。本号をご覧になられた先輩諸氏の中で、記憶を活字に留めたいという方がおられるなら、『静脩』は次号にも百周年関連記事を掲載する予定であり、ぜひとも原稿をお寄せいただきたくお願いする次第である。

（附属図書館事務部長 熊谷俊夫）

## 編集委員

附属図書館 熊谷 俊夫	附属図書館 澤居 紀充	経済学部 菅 修一
附属図書館 石井 保廣	附属図書館 松田 博	薬学部 高橋 和子
附属図書館 長坂みどり	附属図書館 後藤 慶太	大学院エネルギー科学研究科
附属図書館 堤 豪範	文学部 渡邊 誠	紀伊 義孝

附属図書館年表作成：奥 典子（百年史編集史料室）

附属図書館展示会の歩み作成：後藤 慶太

写真提供：廣庭 基介氏及び百年史編集史料室

# CONTENTS

大学は図書館と共に  
京都大学図書館の現地点

館長時代の思い出  
思い出二題  
館長時代の思い出  
大学図書館変革期の20年  
百周年を迎えるまでの3年間  
附属図書館時代の思い出  
昭和20年代の図書館  
『国立大学図書館員に期待する - 公立図書館員の立場から』再考  
揺籃期の参考掛員として  
書庫の明け暮れ  
職員の研究活動  
新館建設について思うこと  
新館建築の思い出  
新館建築中の閲覧業務  
「機械化」初期の頃の思い出

## 現在

京都大学電子図書館システムの現状  
情報リテラシー教育：全学共通科目について  
図書収書システムを使って  
新雑誌収書システムを利用して  
新しい目録業務システムについて  
iLiswave 閲覧システムについて  
新ILL システムについて  
京都大学電子図書館の現在

## 展望

附属図書館に望むこと  
謙虚な気持ちで  
利用者の目から見た附属図書館  
図書館、システム、情報環境  
資料のより効率的・迅速な入手のために

## 研究成果

島 文次郎 本館初代館長略伝

## 記念講演

弁慶像の展開：御伽草子『弁慶物語』

## 歩み

京都大学附属図書館100年の歩み  
京都大学附属図書館展示会の歩み  
あとがき

総長 長尾 真 1  
館長 菊池 光造 3

西原 宏 5  
西田 龍雄 6  
万波 通彦 8  
岩猿 敏生 9  
高橋 柏 10  
古原 雅夫 11  
河本 芳子 12  
武内 隆恭 13  
大澤 紀子 14  
中村 久蔵 16  
柴田 正子 17  
松田 榮博 18  
金井 孝 19  
井狩らく子 20  
隅田 雅夫 22

朝妻三代治 23  
平元みさえ 29  
島 文子 30  
富岡 達治 31  
赤井 規晃 32  
蒲 彰子 33  
児玉 優子 34  
後藤 慶太 35

野木 達夫 37  
福田知可志 38  
熊谷 和則 39  
山田 周治 40  
鈴木 敬二 42

廣庭 基介 43

池田 敬子 46

事務部長 熊谷 俊夫 55



京都大学附属図書館報「静脩」  
臨時増刊号  
京都大学附属図書館創立100周年記念  
発行日：1999年11月29日  
編集：「静脩」編集委員会  
(責任者：附属図書館事務部長)  
印刷：石田大成社  
発行：京都大学附属図書館  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
TEL.075-753-2613